架空の劇団復活第一回公演

仏壇のない家

くらもち　ひろゆき

登場人物

本舘　忠房	(31)	照妙寺を継いだばかりの若き住職
菊池　里見	(18)	忠房の恋人
菊池　武蔵	(45)	里見の父
藤岡　若葉	(38)	忠房の姉
藤岡　昭久	(42)	若葉の夫、僧侶
千田　千尋	(26)	忠房の妹
千田　頼定	(28)	千尋の夫、僧侶
デイヴィッド	(不明)	アメリカ人
本舘　美貴	(56)	忠房の母
竹花　道高	(19)	忠房の教え子、里見の同級生、檀家
中野　ちえ	(78)	近所に住む檀家
大岩　利香	(28)	誰かの愛人らしい女

仏壇のない家

１９７６年の照妙寺。とある春の昼下がり。
この日、先代住職である忠良の四十九日の法要が行われている。
息子の忠房は、いずれ継ぐときがくる、と、僧侶の資格こそ取ってはいたものの、学校の先生というそれなりにやりがいのある仕事に就いていた。住職となる日はまだまだ先だろうと思っていたのだ。しかし、父の忠良が突然の病に倒れ、あっという間に亡くなってしまったため、当初の予定よりずいぶん早く、住職の地位に就くことになったのである。

身内のみの四十九日を滞りなく行いながら、忠房は何となく落ち着かない様子である。
明日は竹花家総本家の葬儀が控えている。竹花家総本家は古くからの檀家で、父の忠良が最も気を遣っていた檀家である。

舞台の下にはなにやら大きな寝袋のようなものが横たわっている。時折、もぞもぞと動くので、中には人が入っているようだ。

忠房、袈裟を纏ってそそくさと登場し、舞台中央に座ると、咳払いを一つ二つして、傍らの鐘をたたき、読経を始める。
その読経をきっかけに、続々と登場人物が現れ、それぞれ定位置に正座し、読経に加わる。
舞台下の寝袋のようなものから、一目で外国人だとわかる巨大な白人が現れ、ゆっくりと舞台上の登場人物の後ろに回って、体を小さく折り曲げて読経に加わる。

読経が次第に進むうち、また徐々に人々が去り、残るのは、先ほどの外人と、この照妙寺の家族、忠房、美貴、若葉、千尋、昭久、頼定である。

読経の間、千尋は何回か欠伸をかみ殺す。

読経が終わる。
くるりと後ろに振り返る忠房。

忠房　・・・説教、したほうがいいですかね・・・。
昭久　はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは。
千尋　別にやんなくてもいいんじゃないの、身内なんだし。
若葉　（同時に）やりたきゃやればぁ、誰も聞いてないと思うけど。
忠房　・・・あ、そう・・・。
若葉　だいたい何の話すんの。
忠房　まあ、あの蓮如上人の御文あたりでも・・・。
若葉　ほほう。
昭久　はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは。
頼定　聞きましょうよ、ね、ほら、住職にもなっちゃったんだし。
忠房　なっちゃったねぇ、なんだか。
美貴　聞きますよ、立派にやってみてちょうだい。
千尋　無理だって。
頼定　そんな、だって聞いてみたいじゃない、ねえ、お兄さんの説教なんて。
若葉　そうかしら？
千尋　ありがたくないよぉ。
忠房　そんなぁ。
若葉　まあ、やってみれば、明日の予行演習だと思って。
忠房　まあ、それもあってね。
若葉　竹花家総本家、大変だよぉー。
忠房　脅かさないでよ。
昭久　じゃ、わたしが・・・。
忠房　え？
若葉　何であんたがするのよ！
昭久　まあ、適任かなぁと。
若葉　何言ってんのよ！
昭久　エジプトの、ですね。
若葉　何でエジプトなのよ！
千尋　まあまあ。
昭久　スフィンクスってのがいるでしょ、あの、顔が人で体がライオンという。そのスフィンクスは、昔そこを通る旅人に謎をかけたんですね、なぞなぞ。で、その謎が解けないとスフィンクスは旅人を食ってしまうという。

この台詞の間に千尋欠伸をする。

頼定　あ、それ知ってますよ。
昭久　いるんだよねえこういう人。人がせっかくありがたい話聞かせようってのに、先にそれ知ってるって言っちゃうやつ。もう最低だね。ギャグの途中でオチ言っちゃう奴。
頼定　ギャグなんですか？
昭久　違うよ。
頼定　あ、すいません。
昭久　んじゃ黙って聞くように。
若葉　さてと。

と、立ち上がる若葉。

千尋　あ、着替える？
若葉　うん。
千尋　んじゃあたしも。（欠伸をする）
昭久　こっからが面白いんだけどなぁ。
若葉　うん、そうね。
千尋　面白そう。

つれなく去って行く二人。

頼定　それで？
昭久　うん、それがね、えっと、何だっけ？
忠房　スフィンクス。
昭久　ああ、スフィンクスね。

遠くで電話が鳴る。

忠房　母さん、電話。
美貴　あ、はい、ちょっとごめんなさい。
昭久　あ、お母さん・・・。
忠房　続けて続けて・・・。
頼定　スフィンクスが？
昭久　旅人に謎をかけたわけだ、まあ、この話は有名だからご存じの方も多くいらっしゃると思いますけど、その、問題っていうのが、こうです。朝には四本足、昼には二本足、そして夕べには三本足になるものなーんだ。
頼定　人間。
昭久　そう！　正解！　人間なわけだ。人は赤ん坊の頃、はいは

いして四本足、立ち上がって二本足、そいでもって老いて杖ついて三本足。と、でも、このスフィンクス伝説、エジプトばかりじゃなくて、いろんなところにあるんだね。まあ、エジプトのスフィンクスにはひげがついてたって話があるから男なのかもしれないけど、これ、別のところでは、顔が女、女性ですね、で体がライオンっていう、何ともこうなまめかしいような、ね、お寺でするにはふさわしくないような姿をしてるんだな。それで、旅人に謎をかけるんですね、さっきの。それでできない旅人を食ってしまう。この旅人ってのはたぶん男なんだよね。男がその、なまめかしい怪物に謎をかけられて、それで食われてしまう。この、男がね、女性に食われてしまうイメージってのは、恐ろしくはあるんだけど、その一方である種の恍惚を孕んでいると思うんですよ。食べちゃいたいくらいかわいいっていう言い方がありますけど、これは究極の愛情表現なんですね。これはまあ、腹が減ってるわけではなくて、同化したい、取り込んでしまって一つになりたい、それほどかわいいと。ただ、スフィンクスの場合、ある種の飢餓感が感じられますね。飢えてるのね、お腹空いちゃってる。多分愛情関係の飢餓感ね。だいたいスフィンクスってのは町の中にずかずかやって来て、誰彼構わず謎をかけて手当たり次第に食いちらかすわけではなくて、普段は郊外に住んでて、住んでってのもおかしな話だけど、まあそんな人通りもないところで、旅人をただひたすら待ってる。多分過去に、度を超した愛情におぼれた時期があったんだねぇ。だから人里離れたところなんかで旅人待っちゃうんだ。寂しくてどうしょもないんだけど、待ってるんだ。愛おしくて愛おしくて、ずうっと待ってる。愛情も度を過ぎると飢えた怪物にまでなってしまうんだな。ま、普通、四十九日あたりだと、このくらいの話をして、亡くなってしまった仏さんは愛おしいけど、度を超すと怪物になってしまうから、謹んで哀悼の意を表しましょうと、ね。つかみはエジプト。

忠房　はあ。

頼定　エジプトかぁ。

昭久　ほら、坊主がいきなりエジプトって、なんかいいじゃない。

頼定　そうかなぁ。普通はインドでお釈迦様でしょ。

昭久　普通じゃないからいいんだよ！　普通だったら普通じゃないか。普通じゃ普通、普通の人は普通に聞いてくれないんだよ。だから普通じゃないところから入って、普通の人が普通につまんなくなく聞けるように、ちょっと普通じゃないエジプトなんじゃないの。インドじゃ普通でしょう。

忠房　なんか、普通ってどういう意味かわかんなくなってきます

ね。
昭久　普通は普通でしょ、ふつう。んでね、スフィンクスの謎ってのは、一種の愛情表現だと思うのですよ。で、その問題ができないというのは、スフィンクスの愛情を受け入れるということになるのですよ、きっと。だってね、このなぞなぞに答えられちゃったら、がっかりしたスフィンクスは、がっかりしたスフィンクスって、なんかいいね、崖から身を投げて死んでしまうんだから。つまりこの問いに答えるということは、スフィンクスの愛情をきっぱりと拒否するという宣言なんだな。
頼定　つまりなぞなぞができちゃうと、嫌いだってことですか？。
昭久　え？
頼定　愛があれば食われてもいいと。
昭久　ほら、あるじゃない、仏教関係の法話でも、お釈迦様が、旅をして山の中で疲れちゃって腹減っちゃってしょうがないとき、三匹の動物が現れて、なんだっけかな、まあ、狐と熊だっけかな、虎だっけかな、とにかくあとウサギがいて、他の連中は何か持ってくるんだけど、ウサギはなにも持って来られなくて自らの身を火にくべてウサギの丸焼き食ってくださいと。
頼定　でも、それは腹減ってるのは旅人でしょ。
昭久　そうだよ。
頼定　スフィンクスの話は腹減ってるのは旅人じゃないでしょ。
昭久　だからスフィンクスは腹減ってるわけじゃないって言ってるじゃない。
頼定　いや、それはそうなんだけど、スフィンクスとしては「このなぞなぞに答えないでちょうだい、腹減ってるわけじゃないんだけど愛しいあなたを食べたいから」って思ってるんですよね。
昭久　ん？
頼定　だから、スフィンクスに食われるということで、愛が成就するとすれば、なぞなぞというのは美しくもおぞましい男女の共犯関係ですよね。
昭久　よくわかんない。なにが言いたいの？
頼定　旅人は、食われるのはやだろうなぁと。
昭久　ん？
頼定　だからぁ、愛情に答えるのはいいけど、食われるのはやだろうなぁと思うんですよ。
昭久　そうだよ。
頼定　なぞなぞの、答えがわかってても答えないのが愛情ですよね。
昭久　なに？　もう俺の話聞きたくないの？

頼定　いや別に・・・。
昭久　いいんだよぉ、別に無理して聞かなくても。
頼定　いやそういうつもりじゃ・・・。
昭久　じゃあどういうつもり？
忠房　まあまあ・・・。
昭久　なんか突っかかるんだよなぁ、この人。
頼定　そういうわけじゃないですよ。
昭久　そうかなぁ。
頼定　そうですよ
昭久　そうかなぁ。
頼定　そうですよ。
忠房　まあまあ・・・。
デイヴィッド　あのー、続きは・・・。

三人の注目がデイヴィッドに集まる。

デイヴィッド　あの、続き・・・。
昭久　・・・君は、いい外人だな。何人だ？
デイヴィッド　アメリカ人です。
昭久　君は、いいアメリカ人だな。
デイヴィッド　デイヴィッドです。
昭久　君は、いいデイヴィッドだな。
デイヴィッド　ありがとうございます。
頼定　またそうやって馬鹿にして、外人だからって。
昭久　馬鹿にしてないよ、そういう事言う人が馬鹿にしてんだよ。
忠房　まあまあ、ほら、昭久さん、続き続き。
昭久　だってすぐ話の腰折る人いるからなぁ。
頼定　折ってないっすよ。

と、立ち上がり。

忠房　どこ行くの？
頼定　あ、はばかりに・・・。
昭久　はばかれはばかれ・・・。
忠房　戻ってくるよね。
頼定　それはどうだか・・・。

頼定去る。
と同時に再び電話の音が響く。
そして二、三回で音がとぎれる。

忠房　なんか、少なくなっちゃいましたね、説教される人が。
昭久　人数じゃないの説教は。心意気なの説教は。
デイヴィッド　あの、足、くずしていいですか？
昭久・忠房　え？　あ。
昭久　どうぞどうぞ。

足をくずすデイヴィッド、しかしすでに痺れている。

デイヴィッド　はあっ、うくっ。

小声の英語で「くそっ、足が痺れた」などと言っている。

昭久　足、痺れたの？

デイヴィッド、痺れてる。

昭久　それは大変だねぇ。

と、デイヴィッドの足を突っつく。

デイヴィッド　ウワオ！
忠房　（同時に）あ、何やってんですか、大人気ない！
昭久　はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ。大東亜戦争の復讐だ！　日米安保はんたーい

悶えるデイヴィッド。

昭久　大人気ないのも大人気のうちだからね。
忠房　いい屁理屈だなぁ。

遠くから美貴の声がする。「おぼうちゃーん」と呼んでいる。どうやら忠房はお母さんに「おぼうちゃん」と呼ばれているらしい。そして美貴登場。

美貴　おぼうちゃん。
忠房　あ、はい。
美貴　電話。
忠房　え？　あ、誰？
美貴　菊池さんて、男の人。

忠房　菊池。
美貴　なんか、重大な話があるらしいよ。
忠房　きくち・・・正夫かな？

忠房、美貴、去る。残される昭久とデイヴィッド。
昭久はいまだにデイヴィッドの足を突っついている。

デイヴィッド　もう、やめてください。
昭久　さて、ここで問題です。朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足は人間ですが、朝は草、昼は虫、さて、夜は何でしょう。
デイヴィッド　・・・。
昭久　ちょっと難しかったかな。
デイヴィッド　・・・。
昭久　・・・日本語、わーかりますかぁ？
デイヴィッド　・・・少し・・・。
昭久　朝は草、昼は虫、さて、夜は何でしょう。

いつの間にか若葉が現れている。

若葉　またそういう適当な問題出して。
昭久　適当とは失礼な。
若葉　だめよデイヴィッド、真面目に考えちゃ。
昭久　さて何でしょう。
若葉　どうせ答えなんかないんでしょ。
昭久　うっ。
若葉　ほら。
昭久　あるよぉ。
若葉　じゃあ言ってご覧なさいよ。
昭久　だからあるって、そんなすぐ教えちゃったら面白くないでしょ。
若葉　別にいいよ、どうせ面白くないんだから。
昭久　・・・そうか・・。
若葉　いいのよ、面白くなくって・・・ぜんぜん・・・。
昭久　・・・そんなに面白くなかったか？
若葉　・・・ずっとね。
昭久　それでか？
若葉　え？
昭久　それでか？
若葉　・・・。
昭久　・・・それでか・・・。

若葉　ばか。
昭久　・・・まだ、いるのか、こっち・・・。
若葉　・・・うん・・・。
昭久　・・・いつ、戻る・・・。
若葉　・・・うんん・・・。
昭久　俺は、もう、帰るけど・・・。
若葉　・・・あたしねぇ・・・。
昭久　明るいうちに着きたいから・・・。
若葉　あ、うん。
昭久　明るいうちにな・・・。
若葉　・・・気をつけて・・・。
昭久　・・・うん・・・。
若葉　荷物は？
昭久　ああ、もう愛車のスバル３６０に・・・。
若葉　（小声で）何でそう細かく・・・。
昭久　え？
若葉　さすがに雪は降らないでしょうけど。
昭久　おまえさあ・・・。
若葉　お母さーん、帰るってー。

若葉、美貴を呼びに行こうとする。

昭久　若葉！

若葉、ゆっくりと振り返る。

若葉　・・・なに？
昭久　あ、いや、なんでもない。

若葉、一瞬昭久を睨む、その先を聞こうとするように。
しかしその先が続かないので、くるりと後ろを振り向き。

若葉　・・・お母さーん

若葉母を呼びに去る。
残る昭久とデイヴィッド。

昭久　こういう時、外人はなんて言うんだ？
デイヴィッド　・・・？
昭久　いいよな、外人は・・・。

デイヴィッド　・・・？

昭久、若葉の去った方と反対に去る。
残るデイヴィッド。一瞬肩をすくめたのち、楽な姿勢で座り、手を合わせる。
鳥の鳴き声がする。
いつの間にか遠くで銃声と、飛行機の爆音がし始める。
ただひたすら手を合わせているデイヴィッド。
背後に千尋が現れる。そして、手を合わせているデイヴィッドの姿をじっと見る。

千尋　クリスチャンじゃないんだ。

振り返るデイヴィッド。なぜかあわてて逃げる。

千尋　・・・変なの・・・。

お腹をさする千尋。
美貴の声が聞こえてくる。「あらあらまあまあ」などと言っている。手にはお茶道具を持っている。

美貴　もう少しゆっくりしてったらいいのにまったくもう、若ちゃんたら、昭久さーん・・・あれ？　ちいちゃん、昭久さんは？
千尋　知らなーい。
美貴　帰っちゃうんだって。
千尋　遠いもんねぇ。
美貴　お茶の一杯くらいねぇ、あ、一杯茶じゃ縁起悪いから二杯くらいねぇ、若ちゃーん、ポットー。はいこれ。
千尋　はいはい。

と言いながらお茶道具を千尋に渡す美貴。

美貴　あらあらまあまあどこ行っちゃったのかしら？　あ、ちいちゃん、飯台もよろしくね、昭久さーん。

美貴、外に昭久を探しに行く。
一人になった千尋、お茶道具を持ったまま呆然とする。

千尋　飯台ねえ。

ポットを持った持った若葉登場。

若葉　お茶、飲むでしょ？
千尋　あ、お茶ねぇ、飲むの？。
若葉　んじゃ入れて。
千尋　ええーっ。
若葉　あんたのがお茶煎れんの上手でしょ。
千尋　お姉ちゃんいつもそうやって人使うよね。
若葉　はっはっは。
千尋　あたしだっていつまでも使われてないよ。
若葉　そうかしら？
千尋　ま、今回はしょうがないから煎れてあげるけどね。
若葉　ありがとう。
千尋　そのかわり、飯台準備して。
若葉　お安いご用。

ポットを置いて飯台を準備し始める。
千尋、お茶道具を置いて座る。

若葉　あっと言うまだね。
千尋　うん。
若葉　次は一周忌？
千尋　うん。
若葉　その次は三回忌。
千尋　うん。

若葉は飯台を準備するために奥の部屋に入った。

千尋　なんか、眠いね。
若葉　（声）あ、そう。
千尋　今日、帰るの？
若葉　（声）帰んない。
千尋　あ、そう・・・あれ？
若葉　（声）あんたはどうなの？
千尋　どうって・・・。
若葉　（声）帰るの？
千尋　そりゃ帰りますよ。
若葉　（声）ふうん。
千尋　まあ、近いからね。
若葉　（声）幸せ？

千尋　いきなり何言ってんのよ、お姉ちゃんは？
若葉　（声）つまんないこと聞くんじゃないの！
千尋　先にお姉ちゃんが聞いたんじゃないの。
若葉　（声）あらそう？
千尋　そうでしょ。
若葉　（声）んじゃ聞かない。
千尋　お通夜ん時からずっとでしょ。

若葉「うんこらしょ」と飯台を持って登場。

若葉　忠房大変でしょうよ、まだ、あれなんだし、慣れてないんだし。
千尋　そりゃそうだけど。
若葉　お茶煎れてよ。
千尋　ああ。

千尋、飯台にお茶道具を置こうとするが、戻して立ち上がり。

千尋　台拭き持ってくる。
若葉　気にしない気にしない。
千尋　・・・まあ、いっか・・・。

下手側より、ちえ現れる。

ちえ　あらちょうどいいとこに来ちゃったわねぇ。
若葉　中野おばちゃん。
ちえ　お茶ごちそうになってこうかね。あれ？　こっちのきれいなお嬢さんは・・・。

などと言いながら上がる。上がり口に花束を置いて。

千尋　あらやだ、おばちゃん。きれいだなんて。
ちえ　最近目ぇ悪くなってね、若ちゃん、灰皿あるかい？
若葉　ああ、はい。

若葉、灰皿を取りに行く。

ちえ　おっきくなったねぇ、ちいちゃん。これじゃちいちゃんなんて呼べないねぇ。おおちゃんかだいちゃんだねぇ。

千尋　はあ・・・。
ちえ　英語だとジャンボちゃん？ ジャイアントちゃん？
千尋　結構前からこの大きさなんですけどね。
ちえ　いやおっきくなったねぇ・・・見事に。

千尋のそばに行って見上げるちえ。

ちえ　いやあ、大したもんだ。若ちゃん、いつ来たの？　昨日？
千尋　いや、ああ、はい。
ちえ　ちいちゃんは、ねえ、近くだからねぇ。
千尋　ええ、まあ。
ちえ　若ちゃんは、福島だっけ？
千尋　いえ、秋田です。
ちえ　あぁ、そうだったそうだった。
千尋　まず、どうぞ・・・。
ちえ　ありがと・・・座布団は？　あっちだっけ？
千尋　あらら、気がつきませんで。
ちえ　ごめんねぇー、催促しちゃったみたいで。
千尋　いえいえ。

千尋、座布団を取りに奥へ去る。
ちえ、飯台の表面を指でさっと撫で、ふっと吹く。
そこへ、忠房登場。

ちえ　こんにちは。
忠房　あ、どうも。
ちえ　聞いたわよ、若ちゃん、帰ってないんだって？
忠房　え？　ええ、まあ。
ちえ　なんかあったの？
忠房　まあ、俺が頼りないんでしょうけどね、ま、どうぞお座りください。
ちえ　今ね、ちいちゃんが座布団持ってきてくれるって。
忠房　ああ。

お茶道具が下に置いてあるのを見た忠房は、それを飯台の上に置こうとする。

ちえ　あああ。
忠房　え？
ちえ　飯台が・・・。

忠房　ああ。
ちえ　おぼうちゃんは結婚しないの？
忠房　え？
ちえ　結婚。
忠房　あ、いや、うん、まあ、はあ、そのうち。
ちえ　お寺さんだからって安心してちゃだめよ。
忠房　え？　何でお寺だと安心なんですか？
ちえ　だって、お寺なら食いっぱぐれないじゃない。ねえ、坊主丸儲け。
忠房　そんなことないですよ、今景気悪いですし。
ちえ　景気関係あるの？
忠房　あるって言ってましたよ、親父は。
ちえ　ないでしょうよ、景気良くても悪くても人は死ぬんだし、死んだらお葬式するんだし。そしたらご祝儀もね。
忠房　ご祝儀じゃないです。
ちえ　まあまあ、景気悪い方がよく人死ぬんじゃないの？
忠房　あ、いや、それは、うーん。

千尋、座布団を二枚持って登場。
ほぼ同時に若葉が灰皿と台拭きを持って登場。

千尋　あ、お兄ちゃん。座布団いらないよね。
忠房　あ、うん。
若葉　お茶はいった？
千尋　いや、まだ。
若葉　はい、灰皿。
ちえ　ごめんなさいね、使っちゃって。

ちえ　ごめんなさいね。
千尋　おばちゃん、どうぞ。

千尋、ちえに座布団をすすめて、自分も座布団に座る。
四人、それぞれ座るがなぜか同時。それぞれうなったりする。
若葉は、台布巾で飯台を拭く。
ちえと忠房は、それぞれたばこを取り出し、火をつけようとするが、忠房はマッチを切らしていたため、ちえから火をもらう。
ちえの火はライターである。
忠房は、最後の一本だったらしく、箱を握りつぶす。

ちえ　おぼうちゃん。

忠房　あ、どうも。（と、火をもらう）
若葉　あ、お茶。
千尋　そんなにお茶飲みたい？
若葉　うん、だってあんたの方が好きでしょうよ。
忠房　（一口吸って）ライターだと、旨いですね。
ちえ　でしょう。マッチとは一味違うのよね、一回ライター使っちゃったらマッチには戻れないわよ。
千尋　そんなに違うの？
忠房　違うね、なんて言うか、香りがね。
若葉　香りねえ。
忠房　マッチだと、ほら、なんか、つんつん来るじゃない。

千尋、突然立ち上がり、上手へ去っていく。

若葉　あれ？　お茶。
千尋　あ、ちょっとトイレ。
若葉　あ、そう。
忠房　そういやさっき千田君入ったぞ。

それには答えずトイレに直行する千尋。

忠房　大かな。
若葉　え？
忠房　あ、いや、別に。
若葉　おばちゃん今日はお墓参り？（上がり口の花束を見ながら）
ちえ　うん、お茶よばれに・・・。
若葉　あ、はーい。

しぶしぶお茶を煎れ始める若葉。

ちえ　若ちゃんも、お茶煎れてばっかりでしょう。
若葉　え？　ええ、まあ。
ちえ　やっぱり、お寺好きなの？
若葉　まあ、うちがこれですからね。
ちえ　あそう。ふーん・・・。
若葉　だから違和感はないって言うか・・・。

ちえ、忠房、ゆっくりたばこをふかす。
間。

若葉の入れるお茶の音が響く。

ちえ　・・・誰か、おつきあいしてる人いるの？
若葉・忠房　え？！
若葉　な、そんな、いないですよ、これでもわたし人妻なんですから。一応は。
ちえ　若ちゃんじゃないわよ。
若葉　あ！
ちえ　おぼうちゃん、あ、いけないね、いつまでもおぼうちゃんじゃないね。ごめんねぇ、おばちゃんいつまでも若いつもりしてて。
忠房　いや、いいですよ、おぼうちゃんで、今はおぼうちゃんですから。
ちえ　もうご住職様だもんね。ちゃん付けじゃ失礼よね。
忠房　まあ、まだ、ちゃん付けですよ。
ちえ　あのね、おぼうちゃんにね、いい話があるのよ・・・。

美貴、外から戻ってくる。

美貴　昭久さんこっち来てなぁい？
忠房　あれ？　さっきまでいたでしょ。
若葉　知らないよ。
美貴　なんかいないのよ。
若葉　帰ったんじゃないの？
美貴　そんな、挨拶もしないで・・・。
ちえ　こんにちは。
美貴　あら、あらあらあら、中野おばちゃんじゃないの。
ちえ　どうかしたの？
美貴　いや別になんでもないんだけどね、あ、お茶飲みましょお茶。こないだもらったの、あれ、なんだっけ、お土産、美味しかったの。中野さんありがとうございました。あらら、お茶菓子もなくてねぇ、今ちょっと準備してくるから。
ちえ　（若葉に）旦那さん帰っちゃったのかねぇ？
美貴　（忠房に）菊池さんだっけ？　なんだって？
忠房　え？　ああ、さっきの電話？
美貴　うん。

と、答えるやいなや、お茶菓子を持ってくるために素早く去ってゆく美貴。

忠房　あぁ、なんか、すぐ切れた。あれ？
若葉　行っちゃったよ。
忠房　素早いなぁ。質問しといて答聞かないでいなくなっちゃう
　ってどういうことよ。
若葉　癖じゃない？
忠房　どう思います？（ちえに）
ちえ　お気の毒。
忠房　え？
若葉　菊池って、正夫？
忠房　だと思ったんだけど、違うみたい。なんか・・・。
若葉　ふーん、呼び出しといてすぐ切れたの？
忠房　うん。
若葉　なんにも言わずに？
忠房　うん。
ちえ　無口な人だったんじゃないの？
若葉　こっちで切ったの？
忠房　いや、切られた。
若葉　無口な人じゃないわよ、きっと。
ちえ　そうかねぇ。
忠房　またすぐかかってくるかと思ってたけどこなかった。
若葉　なんか、あれじゃないの？　どっかで恨み買ってんじゃな
　いの？
忠房　ど、どこでよ？
若葉　だからどっかで？
忠房　・・・。
若葉　かもよぉ。
忠房　・・・。
若葉　学校とか・・・。
忠房　・・・。
若葉　生徒とか・・・。
忠房　・・・。
若葉　先生とか・・・。
ちえ　用務員のおじさんとかねぇ。
忠房　いや、用務員のおじさんは、友達ですから。
若葉　ふーん。

　忠房、ゆっくりとたばこをふかす。
　そして、お茶が四人分はいった。
　と同時に美貴がお茶菓子を持って戻ってくる。

若葉　どうぞ。
美貴　はい、これもつまんで。
ちえ　ありがと。
美貴　（同時に）これ、あたし飲んでいいの？
若葉　いいんじゃない？
ちえ　いただきます。
三人　いただきます。

四人、そろって湯飲みを吹き始める。
三回ほど吹いた後、ずずっと飲み、うなる。
そこへ、手をハンカチで拭きながら、頼定登場。

頼定　あ、お茶ですね。わたしにもいただけますか？
ちえ　こんにちは。
頼定　あ、どうも、こんにちは・・・。

若葉しぶしぶお茶を煎れる。

ちえ　こちらの旦那さんは？
美貴　千尋の・・・。
ちえ　ああ、高念寺の。
頼定　住職じゃないですよ。まだ親父が頑張ってますから。
ちえ　あとちょっとよ。
頼定　・・・はあ・・・。
忠房　住職なんてなるもんじゃねえぞ。
頼定　そうですかね。
忠房　めんどくさいから。
美貴　そんなこと言っちゃだめよ、檀家さんの前で。
ちえ　ああ、あたしはいいのよ。
美貴　そうですか？
ちえ　あたし今更お墓買うわけじゃないし。
美貴　いや。そういう事じゃなくてね、心構えとしてね。
忠房　だってまだそんな、気持ちの準備が出来てるわけじゃなかったから。
若葉　しょうがないじゃないの！　お父さん死んじゃったんだから！
忠房　いや、うん。
頼定　まあまあ、俺も気持ちはわかんなくないですから。
若葉　はい、お茶どうぞ。
頼定　どうも。

ちえ　まあいつでも心の準備はしといた方がいいってことだね。
頼定　そうしておきます。
美貴　そんなにいやだった？　跡継ぐの。
忠房　いや、まあ、いつかはと思ってたんだけど、まあね。
若葉　覚悟はしてたんでしょ。
忠房　でもなぁ、こんなに早くとは思ってなかったんだよ。
美貴　しょうがないよね、あたっちゃったんだから。
忠房　いびきかいて、寝てるだけだと思ってたもん。
美貴・若葉　そうねぇ。はあーっ（ため息）

間。
お茶を飲む音と、ちえと忠房のたばこをふかす煙。二人たばこを消す。
美貴と若葉、またため息をつく。
千尋、戻ってくる。

千尋　なんか、辛気くさいね。
美貴　せめて、孫は無理でもお嫁さんくらいはねぇ。
ちえ　あ、それ！
他の全員　え？
ちえ　お嫁さん！　いい話があるのよ。
美貴　お嫁さんですって？　あらあらまあまあまあ。

ちえ、持ってきたバッグの中から写真帳を取り出す。

ちえ　そんなね、堅っ苦しいんじゃなくてね、まあ、その、会ってみればって程度でいいんだけど。
忠房　だ、誰ですか？
若葉　あんた以外誰がいるのよ。
ちえ　向こうはホントもう乗り気でね。
美貴　あら助かるわぁ、まったくこの子は、そういう気がないのかと思ってたもんだから。
忠房　いやちょっと・・・。
美貴　だってほら、ねぇ、相手なんかいないんでしょ？　それならねぇ、やっぱり人のお世話にでもならないとねぇ。
忠房　いや、ちょっと、そうは言っても。
ちえ　いいからいいから、見るだけでも見て。
忠房　心の準備がまだ。
ちえ　いいのいいの。
若葉　んじゃ、十数えるからその間に心の準備して。

忠房　ええー。
頼定　まあ、観念して、ね、お兄さん。
若葉　十。
忠房　え？　もう十？
若葉・千尋　バカだねぇー。
若葉　カウントダウンよ。
忠房　ああ。
若葉　九、
八、
七、
六、
五、
四、
三、
二、
五。
忠房　え？
若葉　四、
三、
頼定　四、
五。
忠房　戻ってる戻ってる。
頼定　六。
忠房　そのままそのまま。
頼定　五。
忠房　あっ。
頼定　四、
三、
二、
二、
二。
若葉　三、
四、
五、
頼定　六。
若葉　もう一回ちゃんと心の準備するのよ。
忠房　え？　うん。
若葉・頼定　五、

美貴　ごめんなさいねぇ、この子ももう三十過ぎでしょ、いい加減ねぇ、落ち着いてもらわないとと思ってたのよ。
ちえ　出過ぎた真似と思ったんだけどね。
美貴　いいの、そうでもしないとその気になんてならないんだから。
ちえ　いい娘さんなのよ、ほら、これ。
と、写真を美貴に見せる。
千尋　わたしも。
と、のぞき込む。
若葉　どれどれ。
顔を見合わせる三人。
ちえ　いい娘さんでしょう。
美貴　個性的な顔立ちねぇ。
千尋　うん。
間。
ちえ　家事全般、武芸百般大丈夫。
美貴　武芸百般て・・・。
ちえ　言葉のあやよ、あや。

四、
三、
二、
一、
〇。

ちえ　はいどうぞ。

間。
じっくりと見る忠房、のぞき込む頼定。

ちえ　お父さんはね、商売やってるんだけど、ほら、あの、おつき合いあるかも知れない、あの、よく、葬儀屋さんじゃなくて・・・。

ちえ、手を合わせている。

千尋　石材屋？
ちえ　の前。
美貴　の前？
若葉　花屋さん？
ちえ　じゃなくて。
頼定　仕出し屋？
ちえ　離れた。
美貴　葬儀屋？
ちえ　言った。
美貴　互助会。
ちえ　違う。
美貴　お寺？
頼定　それはここでしょう。
千尋　あ、仏壇屋。
ちえ　そうそう、それそれ。
頼定　ほとんど葬儀屋と一緒ですけどね。
ちえ　でも、なんか、話によると、仏壇一本でやってきたって。
頼定　仏壇一本ねぇ。
ちえ　やり手らしいわよ。
美貴　どこの？
ちえ　矢巾だったかしら？　山口さんて言うの。
若葉　山口・・・。わかる？
千尋　さあ。
頼定　それ、仏壇スーパーじゃないですか？

ちえ　そうそう。
頼定　ああ、スーパーですか。確かにね、安いらしいですよ。でも、実はあんまりつきあいないですね。ほとんど知らないですもん。
ちえ　ここには、仏壇ないの？

五人、顔を見合わせる。

忠房・美貴・若葉・千尋・頼定　ああ。
頼定　そうか。
美貴　ないのよ、もうあたしたちはねぇ、当たり前だと思ってるからあれだけど、うちにはね、仏壇ないの。若ちゃんとこもちいちゃんとこもないの、だってお寺自体が仏壇みたいなもんでしょ。あたしたち仏壇で生活してるのあっはっは。もう、ここ、ほら、言ってみれば仏壇の中なの。
ちえ　ああそう。
頼定　まあ、お寺でもあるところはありますけどね、家族のが。あと、仏壇ないのはアパートとか、核家族でまだ誰も死んでないうちとか、教会とか、神社は、あるかな？
千尋　さあ。
頼定　中尊寺とかは、中に神社ありますけどね。なんて言ったかな。
美貴　白山神社？
頼定　そうそう、だったかな？
千尋　置いといて。
ちえ　どう？　おぼうちゃん、照枝ちゃんて言うの。山口照枝。
忠房　いや、あの、実は俺、ちょっと。
美貴　ちょっとなに？
若葉　まーた見栄張っちゃって。
忠房　まず、まだ、その、お見合いはね。
ちえ　会うだけ、会うだけ。
忠房　やっぱりあの、会ってからお断りするのも失礼ですしね。それに、実を言うとちょっと事情があったりしまして。
若葉　なんの事情？
忠房　いや、実は・・・その・・・。
千尋　なに？
忠房　いや、なんかね。
千尋　ないんでしょう。
美貴　でもこれでおぼうちゃんが仏壇屋さんと結婚しちゃったら、うちはもう親戚がそういうのばっかりになっちゃうねぇ。うち

もお寺でしょ。若ちゃんもお寺でしょ、ちいちゃんもお寺でしょ。おぼうちゃんが仏壇屋じゃ、あとは石材屋と葬儀屋とお花屋さんくらいだわねえ。お花屋さんだけさん付けしちゃったわ、不思議ねぇ。

そのとき、不意に竹花が外から顔を出す。

竹花　こんちはー。

忠房、竹花を見る。いきなり嬉しそうな顔になって立ち上がる。

忠房　おおう！　道高、元気か？
竹花　元気です。
忠房　どうだ？　仕事は？
竹花　あ、仕事、やめちゃいました。
忠房　なにぃ！
竹花　すいません。
忠房　何でまた。
竹花　けんかしちゃって。
忠房　お前がか？
竹花　ええ、まあ。
忠房　なんでよ。
竹花　色々ありまして。
忠房　まあいいや、上がれ上がれ。
竹花　あの、今日、お墓掃除しに来たんで。
忠房　いいから、まず上がれ。
竹花　あ、はい、おじゃまします。
忠房　お茶煎れてちょうだい。
千尋　はあい。
忠房　お、なんか狭いな、もう一つ出すか飯台、な。こっちこっち。

忠房、竹花を招きながら奥の部屋へ行こうとする。

頼定　あ、俺行きましょう。こっ

若葉　逃げられた。
美貴　あ、ちいちゃん、お茶は？
千尋　あ、いいや。
美貴　あら珍しいこと。
ちえ　だめかしら？
美貴　なんか、あんまり乗り気じゃないみたいね。
千尋　ま、いいんだけどね。
若葉　誰？　あの子？
美貴　教え子じゃないかしら？学校の。
若葉・千尋　ああ。
美貴　おばちゃん、これだけのためにに？
ちえ　まあ、お茶よばれにね。

ちえ、お茶を飲む。

千尋はお茶を煎れる。

美貴・若葉・千尋　こんにちは。
竹花　あ、こんにちはー。
若葉　教え子？
竹花　はい、そうです。あ、でも、檀家でもあります。

ちですね？
忠房　あ、サンキュー。
　　と、頼定は奥の部屋へ。
忠房　ま、適当に座って、座布団、いらねぇな。
竹花　あ、はい。

若葉　なに君？
竹花　あ、竹花と言います。
美貴　竹花って・・・。
竹花　松竹梅の竹に、フラワーの花です。
美貴　それはわかってるけど。
若葉　おじいちゃん亡くなった？

　　竹花、まだ何となく立っている。

竹花　あれは、その、総本家の方で。うちの、おじいちゃんの、お兄さんに当たる人だそうで。
美貴　竹花雁治郎さん。
竹花　そう、だと思います。
ちえ　あら、雁治郎さん亡くなったの？
美貴　知ってるの？
ちえ　だって、ほら、同じ学校だもの。一つ・・・二つ上かな。
美貴　あらー、そう。初恋の人だったの？
ちえ　えーと・・・んーと・・・・・・違う。
若葉　何で急に初恋の人出てくんのよ。
美貴　だってほら、ねえ。
千尋　答えになってない。はい、お茶どうぞ。
忠房　まず座れ。
竹花　あ、はい。

　　何となくすき間を見つけて座る竹花。

忠房　そうかぁ、お前んとこのじいさんかぁ。
竹花　いや、総本家。
忠房　ああ、うん、総本家ね。いや参ったよ、立派でさ。
竹花　肩凝るでしょ。
忠房　うん。今夜も行かなきゃなんねぇんだけどさ。
竹花　え？　葬式明日でしょ。
忠房　逮夜経っつってな、やるところもあるんだよ。

　　すると、飯台を持って頼定登場。

頼定　はいちょっとごめんなさいよ。

忠房　じゃあちょっと、くっつけよう。

それぞれ自分の湯飲みを持って立ち上がる。
千尋は飯台の上のお茶道具を持って立ち上がる。
そして飯台は横長に二つつながった。
さっきまでちえが座っていた座布団が、飯台の下になってしまう。

ちえ　財閥だもんね。

忠房　また、俺が信用されてないもんだから、いちいちうるさいんですよ。やれ袈裟の色がどうのとか、お経の始まりがどうのとか、あんた一人かとか、あ、ごめんな。

竹花　いや、別に、多分そうでしょう。俺だってあんまり行きたくないですもん。

若葉が台拭きで出てきた飯台の上を拭く。
他の全員は座るが、なぜかちえだけ立ったまま。
座布団がないからである。

忠房　で、何でお前仕事辞めちゃったの？

竹花　だからけんかして。

忠房　だから何でけんかしたの？

竹花　笑われたんですよ。

忠房　え？

竹花　なんかよくわかんないんですけど笑われたんです。

若葉と頼定をきっと睨む竹花と忠房。

若葉　え？　あ、これはその。

二人、目を合わせ、譲り合う。

若葉・頼定　いま座布団を・・・。

二人、譲り合う。

千尋　気が合うこと・・・。

ちえの座布団がないのに気づいた若葉と頼定は、それぞれ反対の方向から座布団を引っ張る。当然引っ張れないので、ふと見ると、目が合って笑ってしまう。

若葉・頼定　はっはっはっはっはっはっはっは。

頼定　え？　あ、これはその。

頼定　いま座布団を取ろうとしたらね、同時に引っ張ってて、それでなかなか取れないんでなんだろうと思って下のぞいたら目が合っちゃって、で、笑っちゃったんだよ。
若葉　はい、どうぞ、座布団。
ちえ　ありがとう、もう膝と足首悪くてね、座布団ないと辛いのよ。ごめんね、なんか。

と、座布団を動かしてもらい、座るちえ。

忠房　別にな。な！
竹花　（笑いながら）怒ってないですよ。
忠房　そうだよな、平日だもんな。平日の昼間に若者がこんなとこでクダ巻いてたら変だもんな。
竹花　ええ、まあ。
忠房　で、今後どうすんの？
竹花　まだ、これからですけど。で、まあ、お墓掃除に。
忠房　お袋さんへ報告か。
竹花　ええ、まあ。
忠房　まず、お茶飲め、お茶。
竹花　はい、どうも。
忠房　お茶菓子も食え、ほら。
竹花　いや、俺、甘いものはちょっと。
忠房　だめか？
竹花　プリンとかはいいんですけど。
忠房　プリンじゃなきゃだめか？
竹花　いや、まあ、甘いものはまずあんまり好まないです。
忠房　そうか。
竹花　お茶、いただきます。
忠房　おう、飲め飲め。

お茶を飲む竹花。

若葉　ホントに、先生みたいだね。
忠房　だって、先生だもん。
若葉　ふーん。
忠房　姉ちゃん俺のことバカにしてるだろ。
若葉　そんなことないわよ。
忠房　しかしやめたかぁ、まだ三ヶ月もたってないだろ。
竹花　はい。
忠房　笑われたくらいでやめんなよ。

竹花　まあ、それだけじゃないんですけど。
忠房　なに？
竹花　やめた方がいいって言われて。
忠房　誰に？
竹花　・・・先祖・・・かなぁ。
美貴　なあに、その先祖って？
竹花　いや、まあ、それは。
ちえ　雁治郎さん？
美貴　雁治郎さんは一昨日だもの、まだ先祖になってないでしょ。
ちえ　先祖っていつから？
頼定　いつから先祖って言われてもねぇ・・・ずっと昔の人は先祖でしょ。
千尋　死んだら先祖なんじゃないの？
若葉　じゃあ、お父さんも先祖？
千尋　そうかぁ。
竹花　いや、もっと前の。
若葉　え？
千尋　守護霊とか？
竹花　ちょっとそこまではよくわかんないですけど。
頼定　なに？　見えるの？
竹花　ちょっとだけ・・・。
忠房　それでやめたかぁ。
竹花　まあ、いいじゃないですか。
忠房　お前な、あとで就職する後輩が困るんだぞぉ。
竹花　まあ、わかってますけど。
忠房　就職指導の先生泣くぞ。
竹花　先生はいいじゃないですか、やめちゃったんだから。
忠房　ん？　バカお前、俺だってやりたくてやってんじゃないんだぞ。親父死んじゃったから仕方なくやってんだぞ。
若葉　そのわりにちゃんとお坊さんの資格取ってんじゃない。
忠房　悪かったな。
竹花　お坊さんも資格あるんですか？
忠房　あるんだよ。
頼定　まあ、ほとんど世襲だけどね。君もお坊さんになる？　取れるよ、資格は。大学行くか専門学校行くか、まあ、宗派も色々あるし。
竹花　知らなかった。
頼定　でもまぁ、住職になれるかは別ね。うちがお寺じゃないと、まあ、大変だわな。
竹花　先生は？

忠房　住職だよ。一応。
ちえ　立派な住職よ。
忠房　立派だなんてそんな。
ちえ　あたしもこの年になってから世渡り上手になっちゃって。

遠くで電話の音が聞こえる。それに素早く反応したのは、
忠房と若葉。

忠房・若葉　あ、電話。
美貴　電話だわね。

誰も立ち上がらない。
牽制し合う家族。
と思ったら、頼定が立ち上がる。

千尋　あなたはいいでしょ。
頼定　あ、うん。
若葉　また忠房じゃないの？
忠房　え？
若葉　早く行かないとまた切れちゃうよ？
忠房　あ、うん。

忠房、仕方なく立ち上がり、電話を取りに向かう。
忠房が去るのを見送ると、注目が竹花に集まる。

千尋　ねえ、竹花君て言ったっけ？
竹花　あ、はい。
千尋　どんな先生だったの？
竹花　え？　まあ、真面目な先生で。
千尋　浮いた話とかなかった？
美貴　学校の先生ってあれでしょ？　女の先生もいるでしょ。まああの子のことだからねえ、そんなもてるわけじゃないでしょうけど、ちょっとくらいねぇ、息子の浮いた話があった方が母親としてもねぇ、それでまたお寺に入っちゃったりしたらその、出会いもなくなっちゃうでしょ。そうなったらやっぱりお見合いでもお世話していただかないと。
ちえ　だからほら、照枝ちゃん。
美貴　ねえ。
若葉　何かない？
竹花　先生ですか？

千尋　保健の先生とかさ。
竹花　保健の先生はおばさんでしたから・・・。
若葉　やっぱないかぁ。
頼定　保健の先生だけが先生じゃないでしょう。
若葉　まあ、そうなんだけどね。
竹花　先生とのなんか、そういうのはなかったですね。
頼定　ええーっ、じゃあ生徒ぉ？　はははっ、いやあ参ったなぁ、羨ましいっていうかなんていうか、やるなぁ、お兄さんも。

頼定に冷たい視線が集まる。

頼定　あ、いや、だから、そのくらいの甲斐性がねぇ。
竹花　いや、だから、ないんですよ、そういう噂が。
美貴・若葉・千尋　やっぱりねぇー。
ちえ　照枝ちゃん。
美貴　でもさっき、もごもご、なんだか、もごもごと、言っていた、のはなぜ？
頼定　やっぱ四十九日だから、何となく気を遣ったんじゃないですか？
ちえ　あらごめんなさい。
若葉　でもあたしたちはいいんだから別に、ねえ。
千尋　ねえ。
美貴　ねえ。
竹花　でも、あれですよ、結構生徒には人気ありましたよ。やっぱお坊さんだけあってなんか、味のある説教するんですよ
若葉　どんな？
竹花　どんなって言われても・・・。
頼定　まあ、スフィンクスの話はしないだろ。
竹花　日本史ですから。
頼定　ああ。
竹花　でも、煩悩の話はしてましたよ。
美貴　あらやだ煩悩だなんて。
竹花　まあ、あの、俺らにですから。
若葉　また偉そうに言うんでしょ。
竹花　まあ。
千尋　どういうの？
竹花　あの、お前らは煩悩の固まりだからしょうがない。
若葉　自分だってそうでしょうよねぇ。
竹花　で、あの親鸞上人ですら煩悩だらけだったんだ。だから、その、煩悩をなくせとは言わん。でも、垂れ流しはいかん。せ

めて煩悩のあることに感謝しろ。煩悩に感謝、ありがとう煩悩。
さあ、みんな言ってみよう。ありがとう煩悩。
千尋　高校生言わないよ普通。
ちえ　それが味のある説教？
竹花　はい、なんか、味があったんですよ。
若葉　言わん、とか、いかん、とか、なんかおっさん臭いよね。
頼定　それがまあ、味なんじゃないですかねぇ。
美貴　お父さんの真似でしょ、きっと。
若葉・千尋　ああ、そうだね。

外に大岩利香が現れる。何となく様子を伺いながらなにも言わずにそのまま去って行く。
気づいたのは竹花だけだった。

竹花　あの、今、何か、女の人が・・・。
美貴　誰かしら？
竹花　いや、わかんないですけど。
若葉　お墓参りでしょ。
ちえ　さてと、あたしもお墓参りしてこようかしら。
竹花　あ、俺も。
ちえ　なに？　あなた手ぶらなの？
竹花　まあ、掃除だけと思ってたんで。
ちえ　あたしのお花分けてあげようか。
竹花　いや、いいですよ。
ちえ　そんな罰当たりよ、お墓に来るのにお花もないのは。

と言いながら立ち上がる竹花とちえ。

竹花　そういうもんですか？
ちえ　年寄りの言うことは素直に聞くの。
竹花　あ、はい、じゃ、ありがとうございます。
ちえ　ごちそうさまでした。
美貴　いえいえお構いもしませんで。
竹花　ごちそうさまでした。
若葉　もう、いいの？　先生と話しなくて。
竹花　まあ、また、そのうち。

と言ってるところに忠房が戻ってくる。

若葉　あ、忠房、竹花君お墓行く｜ちえ　これ置いてくから、考え

って。
忠房　おう、そうか、俺、ちょっとたばこ買ってくる。千田君、一緒に行こう。
頼定　いや、俺、まだありますよ。
忠房　いや、まあ、いいから。
頼定　あ、そ、そうですか？

と言ってる間に頼定の腕を取って出かける体制の忠房。

頼定　あ、わかりましたから、あの、財布。
忠房　大丈夫大丈夫。
頼定　あああ。
忠房　俺持ってるから。
頼定　いや・・・。
忠房　んじゃまたな、道高。
竹花　あ、はい。

などと、と言いながら去ってゆく二人。

忠房と頼定は玄関へ、ちえと竹花はさっき上がって来たところから去って行く。
見送る美貴と若葉。黙々と飯台を拭いている千尋。

美貴・若葉　さてと・・・。

振り向いて飯台を見る。

美貴・若葉　片づけちゃったの？
若葉　あたしの分まで。
千尋　うん。
若葉　きちんとしてるわね。
千尋　まあね。
美貴　出がらしでいいからもう一杯ちょうだい。
若葉　あたしも。
千尋　はいはい。

て、ねぇ。
美貴　いや、でも本人が乗り気じゃないから・・・。
ちえ　でもお母さん乗り気でしょ。
美貴　忠房よりはね。
若葉　どうすんの忠房？　お見合い。
忠房　あ、いや、あとで。
ちえ　あとでって、ほら、まず、ね、よく考えて。向こうはもう乗り気だから。

この間、千尋はお茶道具を片づけ、飯台の上を台拭きで拭く。

美貴　あ、また良かったら帰り顔出して。決めとくから。
ちえ　あらそ。
美貴　すぐ帰ってくるんでしょ、おぼう！
忠房　ああ、うん。

と、お茶を煎れ始める千尋。

美貴・若葉　はあぁーっ。（ため息をつきながら座る）
千尋　そんなため息ついてると年取っちゃうよ。
若葉　だあってー、ねえお母さん。
美貴　あたしは何も言ってないわよ。
千尋　まあ、あれじゃお兄ちゃんもかわいそうだね。
若葉　大体普通さぁ、お見合い写真て写りのいいのを持って来るもんじゃないの？
美貴　よりによってねぇ、この目つき。
千尋　うーん・・・。
美貴　小佐野賢治みたいな顔だわねぇ、記憶にございませんていう感じだわ。
若葉　大体中野おばちゃんの持ってくる話ってロクなのないよね。
美貴　あんたもあったっけか？
若葉　二回ね。
千尋　あたしはないけどね。
若葉　悪かったね。
美貴　若ちゃん、あんたいつ帰るの？
若葉　ええーっ。
美貴　ええーっじゃないでしょ、いつまでもいるわけにいかないんだから。
若葉　だあってぇー。
美貴　だあってぇーじゃないでしょ、もう四十九日も終わったんだし。
若葉　冷たいなぁ。
美貴　そうじゃないでしょ。まあ、ずいぶん助かったけど。
若葉　でしょう。
美貴　それとこれとは別。昭久さんだってちゃんと迎えに来たんだし。
若葉　迎えに来たわけじゃないでしょ。
千尋　はい、お茶。
若葉　それにほら、もう帰っちゃったし。
美貴　ホントに帰っちゃったの？
若葉　いや、わかんないけど。
美貴　離婚なんてしたらかっこ悪くてしょうがないんだからね。
若葉　はいはい。

若葉、立ち上がる。

千尋　あれ？　お茶は？
若葉　ごちそうさまでした。
美貴　こら、若葉。
若葉　はいはい。

若葉去りかける。

若葉　あたしだって我慢してるんだから・・・・。
美貴　そんなの当たり前でしょ。

若葉、去る。

美貴　あ、ちょっと。あーもうっ。

と、お茶を飲む美貴。

美貴　あちっ。なんでああ・・・・。
千尋　だってしょうがないよ。
美貴　え？
千尋　プレッシャーきついもん。
美貴　なんの？
千尋　子ども・・・・。
美貴　・・・・・・はあーっ・・・・何でかねぇ。
千尋　あのさぁ。
美貴　なに？
千尋　いや、うん。
美貴　はい、お茶。
千尋　いや、いい。
美貴　え？　飲まないの？
千尋　うん。
美貴　あら珍しいわねぇ。
千尋　何かね、最近飲みたくないの。
美貴　どうしちゃったの？
千尋　やたら眠くてさぁ。
美貴　春眠？
千尋　もうそんな時期でもないでしょ。
美貴　そうねぇ。
千尋　お母さんさぁ、つわりってどうだった？
美貴　え？

千尋　つわり・・・。
美貴　あらちいちゃん！
千尋　しいーっ。まだよくわかんないんだから。
美貴　（ひそひそ声）何で？　病院行ってないの？
千尋　だから四十九日終わるまでと思って。
美貴　何で、いいじゃないそんなの。
千尋　お姉ちゃんのこともあるし。
美貴　うーん。
千尋　いまいちよくわかんないから。
美貴　どうなの？
千尋　だから、お母さんどうだったのかなぁって。
美貴　そうねぇ・・・忘れちゃってるのよねぇ・・・あ、何かやたらとお酒の匂いが嗅ぎたくなった時があったわねぇ、あれは若ちゃんだったかしらねぇ。
千尋　お酒の匂い？
美貴　うん。
千尋　だからお姉ちゃん酒飲みなんじゃないの？
美貴　多分ね。
千尋　あたしね、何かやたらとキュウリ食べたいの。
美貴　かっぱ？
千尋　かも。
美貴　シソとね、鶏肉の皮がだめになったわね。
千尋　あんまり気持ち悪いとか吐き気があるとかそういうんじゃないんだけど、たばこの煙と、お茶があんまり飲みたくなくなったっていうのと、あと、やっぱりキュウリぼりぼり食ってる。
美貴　多分、間違いないわよ。早くお医者行った方がいいよ。
千尋　うん・・・お姉ちゃんに言わない方がいいかな。
美貴　まあ、今はね。
千尋　だよね。
美貴　まずおめでとう。
千尋　ありがとう。
美貴　ああ、お父さんには報告しなさい。
千尋　ああ、はい。

千尋、客席側を向き、手を合わせる。
その様子を見ながら、お茶道具を片づける美貴。鼻歌を歌っている。「およげたいやきくん」
どうやら嬉しいらしい。
客席側の通路から、ちえと竹花登場。
お墓の入り口。

竹花足早に現れる。後ろにちえが付いてくる。

ちえ　ちょっと、ちょっと待ってぇー。

立ち止まる竹花、振り返る。

ちえ　ほら、これ、半分あげるから。
竹花　ああ、どうも、すいません。
ちえ　こういうのって、お節介よねぇ。
竹花　いえ、ありがとうございます、僕も、急に思い立ったんで。
ちえ　若い人って、あたしみたいなのと暮らすのやなのかしら？
竹花　え？
ちえ　いやなのよねぇ、きっと、口うるさいし役には立たないし。
竹花　そんなことないでしょう。
ちえ　おばあちゃんの知恵袋なんてカビの生えたものはいらないんだって。
竹花　いやあ・・・。
ちえ　あなたのとこはおばあちゃんいるの？
竹花　いや、あの、うちは分家の分家なんで。
ちえ　あ、そう。
竹花　核家族なんですよ。
ちえ　あれ？　じゃあお墓って・・・。
竹花　母です。
ちえ　あらごめんなさい。
竹花　いや、いいんです。もう、ずいぶんと前なんで。
ちえ　悪いこと言っちゃったわね。
竹花　お墓掃除、僕の仕事なんです。あと、料理も結構上手いですよ。親父と、あと弟なんで。
ちえ　あたしが手伝ってあげたいくらいだわ。

デイヴィッドがやってくる。二人の傍らを通り過ぎるとそのまま去って行く。
言葉を止めて見入ってしまう二人。
竹花は少し脅えているようだ。

ちえ　外人ね。
竹花　外人ですね。
ちえ　なんでお墓にいるのかしら？
竹花　いっぱい憑いてる・・・。
ちえ　え？

竹花　いや、なんでもないです。あ、お花、ありがとうございました。うち、お墓こっちなんで・・・。それじゃ。

逃げるように去って行く竹花。

ちえ　どうしちゃったのかしら？

竹花と反対側に去るちえ。
舞台上では、父への報告を終えた千尋が、お茶道具の残りを片づけ、飯台を拭いて去る。
しばしの静寂。
木々のざわめき。
鳥の声。
静寂を破る車のブレーキ音。
そして静寂。

どんどんどん！　と、戸をたたく音。
玄関の戸があわただしくたたかれている。
と同時に声が聞こえる。
里見の父、菊池武蔵の声である。

武蔵（声）　ごめんくださーい。

抑えた声だが、なにやら吹き出さんばかりの怒りが感じられる。

武蔵（声）　ごめんくださーい。

答える者のない静寂。

武蔵（声）　ごめんくださーい。（明らかにいらいらしている）ごめんくださーい。本館忠房さんはいらっしゃいますかー。ごめんくださーい！　ごめんくださーい！　本館忠房さんは！　本館、ごめんくださーい！　本館、ごめんくださーい！　本館、本館忠房さんは、本館、も、本館、本館忠房はいるかー！　本館忠房はいないのかー！

業を煮やした武蔵は、本堂の方へ回る。その間に、声に気づいた若葉が玄関へ向かう。

若葉　はーい、あれ？　誰かいませんかー？

千尋登場。

千尋　どうしたのお姉ちゃん？
若葉　誰か来たと思ったんだけど。

声が聞こえる。

武蔵（声）　本館忠房はいるかー！　本館忠房！

若葉と千尋顔を見合わせる。
その間に武蔵は本堂の方に現れた。そして靴を脱ぐのもどかしく、本堂に上がり込んでくる。
剣幕に押された若葉が聞いた。

若葉　あの、どんなご用でしょう。
武蔵　本館忠房は？
若葉　当、照妙寺の住職です。
武蔵　どこにいる？
若葉　現在、不在でございます。
武蔵　なにぃ？
若葉　おりません！
武蔵　だぁ！

びくっとする若葉と千尋。
そこへ登場する美貴。

美貴　あらあらあらあらまあまあまあまあ、大きな声出して、仏様も生き返っちゃうような大声ですよ困りましたねぇ、どうなさいました？
武蔵　どうなさいましただぁ！
美貴　ここは神聖なる阿弥陀様の御前です！　声を荒げるのはおやめなさい！

と、いいながら、千尋を奥へと追いやり、若葉も自分の後ろへかばう。そして武蔵の前に正座すると。

美貴　どんな事情がおありか存じませんが、いやしくも阿弥陀様の御前で手も合わせず、念仏も唱えず恥ずかしいとは思いませ

んか！　罰が当たりますよ！
武蔵　ううっ。
美貴　まずお座りになって、手を合わせてご覧なさい、心が落ち着きますから。そして、南無阿弥陀仏とお一つ唱えなさい。阿弥陀様は、必ずあなたをお導きくださいます。

武蔵、息を荒げながらも、美貴の言葉に従い、本尊に向かい手を合わせる。
美貴もそれに会わせて手を合わせ。

美貴　南無阿弥陀仏。
武蔵　南無阿弥陀仏。

ちらりと横目で武蔵を見ると、武蔵に向き直る美貴。

美貴　どうなさいました？

武蔵、一つ大きな深呼吸をする。

美貴　落ち着きましたか？
武蔵　・・・はい・・・。
美貴　どちら様ですか？
武蔵　菊池、武蔵と申します。
美貴　菊池さん・・・正夫君ではないですね。
武蔵　武蔵です。
美貴　はい、どういったご用件でしょう？
武蔵　娘が・・・いや、あの、本館忠房さんは・・・。
若葉　留守でございます。
千尋　たばこ買いに行きました。
若葉　だぁ！
武蔵　戻ってくるんですね？
千尋　来ると思いますよ。
武蔵　待たせていただきますいいですね。
美貴　構いませんが、忠房でなければいけないのでしょうか？
武蔵　一番最初にご本人に・・・。
美貴　・・・わかりました・・・お待ちくだされ、くれぐれも取り乱さぬよう重ねてお願い申し上げまする。
武蔵　努力いたしまする。
美貴　こちらへどうぞ。

と、飯台の方に案内すると、座布団を準備し、座るのを見届ける。

美貴　お茶を。
若葉　はい・・・。
武蔵　お構いくだされるな。
美貴　そういうわけにはまいりませぬ。
武蔵　かたじけない。

なぜか時代がかっている二人。
若葉と千尋、去る。
客席に背を向けて飯台の前に座っている武蔵。
その様子をしばらく見ていた美貴だが、落ち着いた様子なのでそのままそっと去る。一人残る武蔵。

客席後ろには、やや小走りに忠房と頼定が現れ、少し落ち着いてから歩き始める。

頼定　でも、その気がないんだったらもう、オロすより仕方ないでしょ。
忠房　ないわけじゃないんだけど・・・。
頼定　じゃあ結婚ですね。
忠房　そんな急に。
頼定　急にったってお兄さんもいい年なんだから。
忠房　それはそうなんだけど。
頼定　じゃあやっぱり水子背負うんですね。
忠房　いや・・・。
頼定　お葬式のあたりじゃないですか。
忠房　なにが？
頼定　いや、その、なにが。
忠房　あと、葬式の、引継とか忙しいとき。
頼定　なんでまた？
忠房　勘弁して。
頼定　すいません。・・・逃げろって電話だったんですか？
忠房　いや、それは・・・。
頼定　それじゃだめじゃないの！
忠房　うん。
頼定　まあ、十発くらい殴られる覚悟でさ。
忠房　そうだね・・・えっ？　十発？
頼定　戻りますか？

忠房　ちょっと待ってよ。
頼定　しかしお兄さんもおとなしそうな顔してやるねぇ。
忠房　それ言わないでよ、結構真剣なんだから。
頼定　じゃあいいじゃないですか。

二人、去って行く。
音楽。
明かりが変わって、武蔵の後ろ姿がスポットで照らされる。
客席後方にもう一本のスポット。
そこへゆっくりと歩いてくる里見。
スポットに入ると、舞台上の武蔵の背中を見つめる。
ふと振り返り里見を見る武蔵。必然的に見つめ合う二人。
里見は微笑み、武蔵は次第に泣き顔になってゆく。
ゆっくりと音と明かりが遠のいて行き、元に戻る。
そこにお茶を持って現れる若葉。武蔵は再び飯台の方に向き直り、背中が小さくなる。
無言でお茶を置いて去る若葉。
舞台前に残った里見のところに、竹花がやってくる。

竹花　あれ？

振り向く里見。

竹花　里見さん？
里見　あ、竹花君。
竹花　久しぶり。
里見　こんにちは。
竹花　先生？
里見　うん・・・まあ・・・竹花君なにやってんの？
竹花　あ、僕？　お墓掃除。
里見　ご苦労様。
竹花　なんでお墓にいるの？
里見　うん、ツツジがきれいで。
竹花　先生、今たばこ買いに行った。すぐ帰ってくると思うけど。
里見　そう・・・。
竹花　あの、お見合いの話とかしてたんだけど・・・。
里見　え？
竹花　いや、でも、断るみたいだから。
里見　そう・・・。

竹花　何か、逃げたっけ。
里見　ふふっ（笑う）。結構逃げるよね。
竹花　うん、逃げる。
里見　逃げてもしょうがないのにね。
竹花　最後はまあ、戻ってくるでしょ。
里見　往生際が悪いって言うか。
竹花　優柔不断なんだよ、きっと。
里見　でも、優しいのよねぇ。
竹花　・・・そうか・・・。
里見　先生、あたしのことホントはどう思ってたのかな？
竹花　好きだと思うよ。
里見　そうかな。
竹花　そうだよ、だって目が違うもん。
里見　そうかな。
竹花　そうだよ。
里見　あたし、お母さんになれるかな？
竹花　え？
里見　なれるかな？
竹花　・・・そうなの？
里見　先生の・・・。
竹花　行こう。
里見　え？
竹花　行こう。
里見　ちょっと・・・。
竹花　だいじょうぶだって、行こうよ。

竹花、里見の手を握り引っ張って去って行く。
上手から、様子を伺うようにして大岩利香が入ってくる。
武蔵のいる本堂の様子を息を殺してのぞき込んでいると、
いつの間にか後ろにちえがいる。

ちえ　あんたここで何やってんの？　何か珍しいものでもある？
利香　あ、いえ。

一瞬振り向く武蔵。しかしすぐに向き直る。

ちえ　何だかしょぼくれたおじさんがいるけど、お茶飲んでく？
　あたしのうちじゃないけど。
利香　あの、今日、葬儀は・・・。
ちえ　誰の？

利香　あの、竹花・・・。
ちえ　雁治郎さん？
利香　そうです。
ちえ　お孫さん？
利香　いえ・・・雁治郎さんに、生前・・・お世話になったものです。
ちえ　お世話にねぇ、どんな？
利香　え？　まあ、いろいろと・・・。
ちえ　人に言えないようなお世話？
利香　（無視して）あのー、すいませーん。（武蔵に）

武蔵少し振り向くが、そのまま元に戻る。

利香　すいませーん。
ちえ　ねーねー。
利香　（無視して）すいませーん！
ちえ　みんなそうやって無視するんだねぇ。
利香　え？
ちえ　そうやって無視して、隠れて老人ホームの話をするんだねぇ。
利香　あの、おばあちゃん。
ちえ　さびしいねぇ。
利香　いや、あの・・・。

美貴登場。

美貴　あらあらまあまあまあ、何かご用でしょうか？
ちえ　お見合いどう？
美貴　あら中野さん、まだね、帰ってこないのよ。
ちえ　じゃあまた出直してくるわね。
美貴　あのお見合い写真は？
ちえ　じっくり見といて。
美貴　そうですかぁ？
ちえ　じゃあごめんください。
美貴　お構いもしませんで。
ちえ　ほら、お客さんだから。
美貴　あらごめんなさい。
利香　どうも、あの、おばあちゃん、ごめんなさい。

ちえ、後ろに手を振って去る。

美貴　どうなさいました？
利香　いえ、何か、悪いことしちゃって。
美貴　騙されちゃだめよ、小さないたずらで喜ぶ人ってたくさんいるんだから。
利香　はあ・・・。
美貴　でも、謝るのは日本人の美徳よ。
利香　あの、今日、葬儀は？
美貴　今日はございませんが・・・。
利香　ああ・・・。
美貴　どちらの？
利香　竹花・・・。
美貴　雁治郎さんですか？
利香　そうです。
美貴　ああ、明日ですね。
利香　明日・・・。
美貴　あの、今日、自宅の方でお逮夜ですので、そちらに行かれた方がよろしいかと思いますよ。
利香　いえ、とんでもない。
美貴　あら・・・。

美貴、ちらっと武蔵を気にすると、武蔵はお菓子をぼりぼり食っていた。

利香　そんな堂々と顔を出せる立場じゃないですから。
美貴　明日の十一時からですけど、どうぞ、お茶でも煎れますから。
利香　あ、いいえ。
美貴　いいじゃないの。
利香　でも・・・。
美貴　人が死んでもね、残されたあたしたちは生きて行かなきゃなんないの。どうせ生きていくんならね、明るい方がいいじゃない。
利香　はい。
美貴　でしょう、でもね、一人じゃ悲しいことに押しつぶされちゃうかも知れないでしょ。そんなときはね、誰とでもいいからお茶でも飲むのよ。
利香　はい・・・。
美貴　お葬式はね、焼いちゃったお骨に手を合わせるんじゃないのよ。成仏させてくれる阿弥陀様に手を合わせるのよ。だから

ほら、上がって、阿弥陀様に手を合わせればそれでいいのよ。ね。

利香　はあ・・・。

美貴　いいから、こっちいらっしゃい。

美貴手招きをしながら奥へ。

美貴　若ちゃーん、お茶ー。私の分もついでにー。

利香、静かに靴を脱いで本堂へ。

美貴　ほら、ここに座って、手を合わせて。南無阿弥陀仏。何回も唱えなくていいのよ。心静かに手を合わせて。南無阿弥陀仏。ね。

利香　はい・・・。（座る）

美貴　いい、南無阿弥陀仏。

利香　・・・。

利香、手を合わせているが、肩が震えている。

そんな様子をちらちらと伺う武蔵。

美貴　雁治郎さんも罪な男よねぇ、孫でもないこんな若い女の子泣かして。でもそれが男の甲斐性ってやつかしら？　そんな甲斐性が、うちの忠房にもあればねぇ。もうお嫁さんいるんでしょうけどねぇ。でも、まあ、お坊さんがあんまり甲斐性あってもしょうがないんだけどねぇ。

その言葉を聞いた武蔵が美貴を睨む。

武蔵　・・・お言葉ですがね、甲斐性なんてものは、それ相応の相手を相手にすればいいんですよ。

美貴　（振り向いて）は？

武蔵　甲斐性なんて、相手が、相手を、相手を選んで、誰でもいいわけじゃないでしょう。

美貴　あら、またお怒りになってます？

武蔵　いいえ別に・・・。

美貴　何か悪いこと言いました？

武蔵、無言で後ろを向く。

利香　なんでそういう人と出会っちゃうんでしょうね。
美貴　縁ていうものでしょ。
利香　そうですね・・・。
美貴　時間がたつとね、何とかなっちゃうのよ、いろんなことが。
利香　そういうものですか？
武蔵（同時に）　そういうもんですかね。
美貴　四十九日もたてば。

間。

利香　・・・南無阿弥陀仏。

そこへお茶を持って登場する千尋。

千尋　はい、お茶どうぞ。
利香　あ、どうもすみません。
美貴　あら？　若ちゃんは？
千尋　使われちゃった。
美貴　まったく、あの、じゃあさ、使われついでにおぼうちゃん探してきてくれる？
千尋　ああ、いいけど。
美貴　たばこにしちゃあちょっと遅いでしょ。
千尋　うん。
美貴　そこら辺、ちょっと見てきて。
千尋　はあい、んじゃ、行ってきまーす。

千尋、そのまま玄関から出て行く。
美貴と利香は飯台の湯飲みのあるところへ行って座る。

美貴　あらあらあら、座布団。
利香　いえ、お構いなく。
美貴　いえいえそういうわけには参りません。

美貴そそくさと奥の部屋へ入って行く。
二人きりになった武蔵と利香のどうしようもない間。

利香　・・・あの、愛に年の差って関係あると思います？
武蔵　え？
利香　いえ、あの、バカなこと聞きました。ごめんなさい。
武蔵　・・・ある。

利香　え？
武蔵　あります。関係あります、年の差、絶対。
利香　そうですか？
武蔵　そんな、上手く行くわけないんだ一回りも年違ったら。
利香　え？　一回りなんて、そんな大した年の差じゃないと思いますけど。
武蔵　バカなこと言うんじゃない、一回りって言ったら十二歳だぞ。そんなに年離れてたら愛なんかじゃないだろう！　親子だろ！
利香　そんなことないと思いますよ！　大体にしてそんなたった十二歳で子ども産むんですか？
武蔵　ものの例えだ。
利香　十八、九ならともかく十二歳はまだ子どもでしょう。
武蔵　十八、九だってまだ子どもだ！
利香　それは立派な大人です！
武蔵　親から見ればまだまだ子どもだ！
利香　子どもは親の知らないうちに成長するんです！　それに好きになっちゃったら年の差なんて関係なくなっちゃうんです！
武蔵　なんだと！
利香　だから死んじゃったらこんなに悲しいんじゃないですか！

利香、泣いている。

武蔵　あ、いや、その・・・。

美貴、座布団を抱えて戻ってくる。

美貴　あらあらまあまあまあ、また大きな声出して。心を落ち着けて南無阿弥陀仏、いいですか？　南無阿弥陀仏。はい、どうぞ座布団。
利香　ず、ずびばぜん。
美貴　どうしちゃったんですか？
武蔵　いえ、ちょっと・・・。
美貴　まず、落ち着きましょう。阿弥陀様に向かって手を合わせて。南無阿弥陀仏。

武蔵、利香、とりあえず本尊の方を向いて手を合わせる。

美貴　南無阿弥陀仏。
武蔵　・・・。

利香　・・・。

舞台前下手より、頼定に手を引かれて忠房がやってくる。

頼定　往生際悪いなぁ。
忠房　あとたばこ一本。
頼定　もう行くしかないでしょ、オロすかオロすか。
忠房　ええ？
頼定　あ、いや、オロすか結婚か。
忠房　ちょっと声が大きいよ。
頼定　だってしょうがないでしょ。
忠房　こんな格好のままでさぁ。

二人は僧侶の服装のままなのだ。

頼定　まず腹決めないと。
忠房　だからもうちょっと待ってよ！

舞台上。

美貴　南無阿弥陀仏。
武蔵・利香　・・・。

客席側より千尋登場。

千尋　あ、いたいた。何やってんの？
頼定　どうした？
千尋　お兄ちゃんにお客さん。
頼定　来たか？
千尋　何か、やくざみたいな人だっけよ。
忠房　ええーっ。
頼定　なんていう人？
千尋　菊池・・・だったかな。
頼定　ほらぁ。

忠房下手側に逃げようとする。
がっちりと手をつかむ頼定。

頼定　逃げたってしょうがないんだから。
忠房　でもさぁ。
千尋　すんごい迫力だったよ「本館忠房」はいるかぁー！

また逃げようとする忠房をがっちりつかむ頼定。

頼定　だからお前もそんなに脅すなよ。

千尋　はあい。
忠房　やっぱり、行くしかねぇかぁ。
頼定　そうでしょう。
忠房　・・・よし、行こう、うん。

と、後ずさりして下手側に逃げようとする。

舞台上

美貴　南無阿弥陀仏。
利香　南無阿弥陀仏。
武蔵　・・・。

頼定　あっち。
忠房　分かってるんだけどね、体がね。
千尋　一人で行ってね、ここで見張ってるからね。
忠房　え？　なんで？　一緒に行こうよ。
千尋　あたしちょっとこの人に話あるから。
頼定・忠房　え？
千尋　頑張って、お兄ちゃん。
頼定　もう逃げないでくださいよ。
忠房　はい。
千尋　はい背筋伸ばして、まっすぐ前向いて。
頼定　大きく左足から、一、二、一、二。

客席側に歩いていく忠房。
それを目で追いながら話をする頼定と千尋。
隣に立つ千尋を見る頼定。

頼定　俺の隣に立つな。
千尋　あ、はぁい。
頼定　でっかいんだから、そこに座れ。
千尋　はぁい。

ポケットからハンカチを出して舞台の縁にかけてやる頼定。
この男、意外に優しい。

頼定・千尋　あのさぁ。
頼定　なに？
千尋　え？　何か話あるの？
頼定　まあね。
千尋　どうぞ。

舞台上

美貴　南無阿弥陀仏。
武蔵・利香　南無阿弥陀仏。
美貴　落ち着きましたか？
武蔵・利香　はい・・・。
美貴　どうしました？
利香　何か、大きい声出したらすっきりしちゃいました。
美貴　少し。
武蔵　お二人はお知り合い？
利香　いえ。
美貴　知りませんけど。
利香　あらそう、何か、いきなり知らない人同士が言い争うのも珍しいでしょ。
美貴　そうですね。
武蔵　何が原因なんです？
利香　いや、あの。
利香　まあ、あの、お恥ずか

頼定　いや、そっちからどうぞ。
千尋　あのさぁ・・・。
頼定　うん。
千尋　これ、まだお母さんにしか言ってないんだけど。
頼定　うん。
千尋　気づいてない？
頼定　いやあ。
千尋　赤ちゃんできた。
頼定　ええ？
千尋　多分。
頼定　ホントに？
千尋　多分。
頼定　・・・病院行かなきゃ。
千尋　嬉しい？
頼定　うん・・・多分。
千尋　そっちは？
頼定　え？
千尋　そっちの話は？
頼定　え？　えーと・・・同じ。
千尋　え？
頼定　おんなじ。
千尋　同じって？
頼定　お兄さん。
千尋　お兄ちゃん？
頼定　いとこだな。
千尋　どういうこと？
頼定　こりゃぜひとも結婚だな。
千尋　何が？
頼定　あ、逃げた！

頼定、走って客席へ。

頼定　お前は走るなよ！　絶対走るなよ！
千尋　ちょっと待ってよ！

頼定走り去る。

千尋　なんなのよ。

しい。
美貴　それはますます聞いてみたいわね。
利香　あのですね。
美貴　はい。
利香　愛に年の差って関係あると思います？
美貴　おろろ。
武蔵　あります・・・ありますよ、絶対。
利香　一回りなんて年の差のうちに入らないですよね。
美貴　うちも、一回りは離れてました。
武蔵　え？
美貴　一回りなんて、同級生も一緒です。
利香　ですよねぇ。
武蔵　そんなことはない！
美貴　大丈夫ですよ、まあ、人にもよると思いますけどね。
武蔵　人によるんじゃだめだ！
利香　とまあ、このような感じで。
美貴　あらそう。
武蔵　いや、その、取り乱しました。申し訳ありません。
美貴　南無阿弥陀仏。
武蔵　南無阿弥陀仏。
利香　南無阿弥陀仏。

玄関から声が聞こえる。

竹花（声）　ごめんくださーい、先生帰ってきましたー？
美貴　はあい。若ちゃーん、ちょっと出てー。
竹花（声）　上がっちゃいま

千尋立ち上がると、お尻の下に敷いてあったハンカチを拾って、しげしげ見ると、くるくると振り回しながら頼定の後を追う。

武蔵　里見・・・きさまが本館忠房かぁー！

竹花　違います、違います。

武蔵素早く立ち上がると、竹花の胸ぐらをつかむ。

武蔵　きさまその手を離せ！

美貴　この子は忠房の教え子の竹花君！　忠房じゃないです！

里見　お父さん違うの！　違うんだってば！

竹花　僕は竹花道高という、里見さんの同級生です！　先生じゃないです！

武蔵　同級生なら手を握ってもいいのか！

竹花　僕、あの、すいません！　すいません！

武蔵　男だったら順序をわきまえろぉ！

竹花　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏・・・。

里見　お父さん、どうしているの？

武蔵　どうしているのってお前、お前こそなんでいるんだ！

ようやく手を離し、今度は、里見に詰め寄る武蔵。

竹花　あの、お父さん。

すよー

ひょっこり顔を出す、里見の手を引いた竹花。

竹花　あの、先生帰ってきました―？

里見　・・・お父さん・・・。

美貴　違うの！　この子は違うの！

里見　お父さんやめて！　この人は竹花君！　竹花君なんだから！

素早く手を離す竹花。

美貴、里見、武蔵を竹花から引きはがそうとする。

若葉登場すると、美貴に加勢する。

若葉　何だかよく分かんないけどやめてー！

美貴　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

美貴・若葉　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

念仏を唱える二人。

竹花を加えて三人で念仏を唱えている。

響く念仏。

フェイドアウトする念仏。

武蔵　お前にお父さんと呼ばれる筋合いはない！
竹花　あの、おじさん。
武蔵　なんだと！
竹花　ああ！　菊池さん。あの、里見さんとはお墓で会いまして、僕は母のお墓掃除するのが当番というか、いつも何か重大なことがあったら報告することになってて、あの、仕事辞めちゃって、で、お墓にいたんですけど、里見さんは、なんでお墓にいるのって聞いたら、ツツジがきれいだと言うもんで、それで、あの、その・・・。

武蔵、里見の顔を見るのを避けて、里見の反対側の方に座る。

竹花　あの、先生は？
若葉　まだ。
竹花　そうですか。あの・・・。
利香　似てる。
竹花　え？

全員、利香を見る。

利香　似てる。
美貴　誰に？
利香　雁治郎さんに。
美貴　あらぁ。
利香　竹花、さんて言いましたよね。
竹花　あ、はい。
利香　似てるわぁ。
竹花　そうですか？
利香　あの、ね、念仏、南無阿弥陀仏って言ってるとき。
竹花　念仏、ですか？
利香　何かと念仏唱えてたんだぁ、あの人。
竹花　あの、誰ですか？
利香　雁治郎さん。
竹花　じゃなくてあの、どちら様ですか？
美貴　この人は、そのぉ。
利香　生前おじいさんに大変お世話になったものです。
竹花　あ、おじいさんじゃないです。
利香　え？
竹花　うちは、分家の分家なんで、まあ、薄く血はつながってま

すけど。じいさんの兄さんらしいです。
利香　それは結構濃いですよ。
竹花　そうなんですか？
利香　そうなんですよ。

玄関の方から「ただいまー」と声がする。千尋だ。
緊張する美貴。構える武蔵。
美貴、ささっと武蔵のそばに行き。

美貴　殴ります？
武蔵　え？
美貴　殴ります？　忠房を。
武蔵　いえ・・・。
美貴　そうですか・・・ありがとうございます。
武蔵　わたしも、そう何回も怒るほど若くないですから。もうそれほどの体力もありませんし。
美貴　ご謙遜。

と言っている間に千尋が入ってくる。

千尋　ただいまー、何か、どうかしたの？
若葉　あ、いや、とりあえずみなさん落ち着きましょう。ね。とりあえずその辺に、適当に。

それぞれ何となく返事をしたりしなかったりしながらその辺に座る。

若葉　どっか行ってたの？
千尋　うん、お兄ちゃん探しに。
若葉　いた？
千尋　うん。
若葉　忠房は？
千尋　逃げた。
若葉・武蔵・美貴　え？
竹花・里見　やっぱり。
千尋　うちの人が追いかけてる。
若葉　頼定さん？
千尋　うん。

注目が武蔵に集まる。

武蔵、どうも怒ってるらしい。

美貴　・・・すみません。
武蔵　・・・逃げるとは・・・。
竹花　先生、よく逃げるんですよ。
若葉　そうねぇ。
千尋　ホントにね。
若葉　お父さんが亡くなるときもそうだった。
千尋　ちょうどね。
若葉　計ったように息を引き取る直前にいなくなったよね。
千尋　うん。
美貴　逃げてもどうにもなんないのにね。
若葉・千尋　はあーっ。

間。

里見　でも、結局帰ってきますよ。
美貴　娘さん・・・ですね。
武蔵　・・・はい。
里見　初めまして、菊池里見と申します。
美貴　本館忠房の母です。
若葉　姉です。
千尋　妹です。
美貴　あの、まだ・・・やっぱり本人来てから、ですね。
武蔵　・・・はい。

みなぎる緊張感。

竹花　あの、僕、じゃあこれで。
美貴　また今度、ゆっくり遊びに来てちょうだい。
竹花　あ、はい。
利香　それじゃあ、わたしも・・・。
美貴　ああ、お構いもしませんで。
利香　いいえ。
美貴　あの、明日十一時からですから
利香　はい、ありがとうございます。
美貴　あの、ご葬儀なんてね、とくにまあ、あの家なんかは、参列する方多いから。紛れ込んでもわかりゃしませんよ。

竹花　先生に頑張ってって伝えてください。
里見　竹花君。
竹花　なに？
里見　ありがとう。
竹花　あとで返してね。
里見　何を？
竹花　まあ、何かあったとき。

利香　はい、ありがとうございます。

利香去る。

里見　うん。
竹花　じゃあ、頑張って。
里見　じゃあね

竹花去る。

美貴　お茶入れ替えましょう、ねえ、冷めちゃったでしょうから。
武蔵　お構いなく。
美貴　若ちゃん。
若葉　はあい。

若葉と千尋、残ったお茶を片づけ、去る。
残る美貴と武蔵と里見。

武蔵　お前、ふらふら出歩いて大丈夫なのか？
里見　うん、多分。
武蔵　多分？
里見　具合悪くないし。
武蔵　そうか・・・。
美貴　あの、忠房、ホントにごめんなさい。いざとなるとからっきしいくじなしで、あの子ももういい年ですからね、色々自分でやらなきゃだめなんでしょうけど。
里見　いざとなったら何とかしますよ。そういう先生でしたから。
美貴　逃げるんじゃないの？
里見　逃げたあとは、なんか解決策を持ってくるんです。
美貴　あらそう・・・娘さん、しっかりしてらっしゃいますね。
武蔵　いいえ・・・。

とかなんとかやっている間に、上手よりデイヴィッドが現れ、本堂の上がり口に腰掛ける。
それを見てちょっとびっくりする武蔵と里見。
デイヴィッドは、空を見上げながら。

デイヴィッド　日本は、平和ですね。

間。

美貴　あ、この人はデイヴィッド、謎のアメリカ人。
武蔵・里見　謎のアメリカ人？
デイヴィッド　こんにちは。

武蔵・里見　こんにちは。
武蔵　日本語できるんだ。
美貴　ちょっとよ。
武蔵　でかいですね。
美貴　アメリカ人だから。
武蔵　そうですか。
美貴　あ、そうだ、デイヴィッドもお茶飲むわね。
デイヴィッド　ありがとうございます。
美貴　じゃあちょっと待っててね。

美貴、立ち上がり、台所の方へ去る。
残る武蔵と里見とデイヴィッド。

武蔵　・・・どうするんだ？
里見　どうするんだって？
武蔵　だから、何しに来たんだ？
里見　何しにって・・・。
武蔵　帰りなさい。
里見　どうして？
武蔵　いいから帰りなさい。
里見　やだ。
武蔵　なにぃ？
里見　やだ。
武蔵　どうするんだ？
里見　ちゃんとしなきゃ。
武蔵　何を？
里見　この子のお父さん。
武蔵　うー・・・。

武蔵やおら立ち上がり、里見のところに行って、パシンと頭を叩く。
振り向くデイヴィッド。
叩かれた里見は、武蔵を睨む。

武蔵　なんで・・・（パシン）お父さんは（パシン）ああ・・・。

と、叩こうとすると、いつの間にかデイヴィッドが側にいて、武蔵の腕を取って押さえる。
振り向く武蔵。

デイヴィッド　ＮＯ。
武蔵　なんだ？
デイヴィッド　ＮＯ。
武蔵　・・・日本だって平和なだけじゃないんだ！
デイヴィッド　ＮＯ。でも、ごめんなさい。
武蔵　謝られたって・・・わかった、わかったから。
　　美貴、戻って来る。
　　美貴　あら、あらあらまあまあ
　　まあ、何をやってるの？　デイヴィッド、どうしたの？
　　デイヴィッドの腕を振りほどく武蔵。
武蔵　いや、何でもありません。あの、彼が悪いわけではありませんので。
美貴　あらそうですか？　それにしても遅いわねぇ。
　　と、美貴が目を玄関に移した瞬間、そおっと様子をのぞいている忠房と目が合う。
美貴　おぼう！
　　全員の視線が美貴の視線の先に集中する。
　　すでに逃げている忠房。
　　しかし、その先には頼定が両手を大きく広げて通せんぼをしている。
　　後ずさる忠房。
美貴　デイヴィッド！
デイヴィッド　Ｙｅｓ　ｓｉｒ！
　　デイヴィッドは、本堂からの出口をふさぐ。
　　忠房はそれぞれの視線をとらえながら目が泳ぐ。
頼定　やめましょうよ、お兄さん、もう逃げるの。
　　頼定、息が荒い。同様に忠房も息が荒い。走ってきたようだ。
忠房　あああああ・・・。
　　座り込む忠房。それを見たデイヴィッドと頼定は、その

場で座る。逃げ道は塞いでいるわけだ。

美貴　忠房、お客さまです。

忠房　ど、どうも・・・。

武蔵、忠房の方に向き直り、正座する。
それに合わせて正座する忠房。

武蔵　菊池です。

忠房　はい。

武蔵　里見の父です。

忠房　当、照妙寺の住職、本館忠房でございます。

若葉と千尋、お茶とお茶道具、ポットを持って登場。

若葉　あら、増えてるわね。

千尋　お帰り。

忠房・頼定　ああ、ただいま。

若葉　まずお茶を・・・あと二つ？。

若葉、千尋とともにお茶を配り始める。
美貴と武蔵と里見の分は飯台に。デイヴィッドのはやたら大きなマグカップ。

千尋　ああ、あたしはいいから。

若葉　じゃあああと一つ。

美貴　デイヴィッドのはそこにね。

頼定　ああ、俺のもここにね。

千尋　あ、はい。

お茶を配り終えると定位置に座る若葉と千尋。
牽制する間。
お茶を注ぐ音。

忠房　・・・結婚します！

全員息を飲む。里見は口を押さえる。

武蔵　な！

美貴　（同時）あら！

若葉・千尋・頼定　（同時）おおっ。
忠房　菊池さん、いや、お父さんと呼びます！

言葉が出ない武蔵、そのまま里見を見る。
里見は顔を覆っていて表情が読み取れない。
武蔵は忠房の顔を見る。忠房は、武蔵の顔一点を見て背筋を伸ばしている。さらに武蔵は美貴の顔を見る。美貴はにこにこしている。
そして武蔵はなぜか本尊を見上げる。その顔は複雑そのものだ。何度も瞬きをしたあと、がっくりと肩を落とす。

忠房　あの、お父さん・・・。

その声に顔を上げる武蔵、視線の先に忠房。ビビる忠房。
武蔵、すっくと立ち上がり、とぼとぼと本堂の出口へ。
道を空けるデイヴィッド。

美貴　あの、菊池さん！
里見　お父さん・・・。

何も言わないまま、去って行く武蔵。

里見　お父さん！

里見、武蔵を追おうと本堂の出口に行くが、靴がないので玄関に回ろうとする。

美貴　そのサンダル使っていいから。
里見　ありがとうございます。

里見、美貴のサンダルを借りて武蔵を追う。
なぜかデイヴィッドも靴を履いて追う。多分また叩かれるのではないかと心配なのだ。
美貴も玄関に回り、武蔵の後を追う。

忠房　ぷはぁー。

と、力が抜ける忠房。

若葉　・・・ねえ、どういうこと？

頼定　奇襲だね。
若葉　奇襲？
頼定　トラ、トラ、トラ。
若葉　意味わかんない。
忠房　おっかなかったぁー。
頼定　ただ逃げてただけじゃなかったんだねぇ。
千尋　結婚、するの？　お兄ちゃん。
忠房　する。
千尋　急だね
忠房　でもないんだな。
若葉・千尋　なんで？
忠房　いや、その・・・。
若葉　教え子？
忠房　ん？　いや、まあ。
千尋　いやらしい。
忠房　え？
頼定　追いかけなくていいんですか？
忠房　え？
頼定　追いかけた方がいいですよ、多分。
忠房　あ、うん。
頼定　奇襲かけたらその後が大事ですから。
忠房　うん。
若葉　ちょっと待ってよ。
忠房　後で、また、詳しく話すから・・・。

と、言い残し、素早く出て行く忠房。

千尋　知ってるの？
頼定　さっき言ったじゃない。
千尋　え？　何を？
頼定　お兄さんに子どもできたって。
若葉・千尋　え？
千尋　言ってないよ。
頼定　言ったよ、さっき、お前子どもできたって言ったとき。
若葉　え？
千尋　あ、まだよくわかんないのよ、あの、病院行ってないから。
若葉　できたの？
千尋　わかんないんだけど。
頼定　できたって言ったじゃない。
千尋　それは、多分。

若葉　ホントに？
千尋　わかんないんだけど、多分。
若葉　・・・おめでとう。
千尋　あ、うん、ありがとう。
頼定　ありがとうございます。
若葉　良かったじゃないの、お母さんには言った？
千尋　え？　うん、まあ、聞いた。
若葉　聞いたって何を？
千尋　まだ病院に行ってないからさぁ、その、つわりとか・・・。
若葉　早く病院行きなさいよ。
千尋　でも、まあ、お父さんの四十九日終わるまではと思って。
若葉　いいじゃないのそんなの。
頼定　まあ、明日にでも、な。
千尋　うん。
若葉　で、忠房も？
千尋　だから言ってないよ。
頼定　言ったよ、いとこだなって。
千尋　はあ？
頼定　その子とお兄さんの子どもはいとこじゃない。
千尋　それはそうだけど・・・はっきり言ってよ、わかんないじゃない。
頼定　わかれよ、そのくらい。
若葉　で、忠房は教え子が相手なの？
頼定　結構真剣だったらしいですよ。まあ、結婚するって言うんだから真剣なんでしょうけど。
若葉　おぼうがねぇ。
頼定　お兄さんやるなぁ。
千尋　いやらしい。
頼定　そんな、人の純情をいやらしいなんて言っちゃいけないよ。
千尋　純情なのかなぁ。
頼定　そういうことにしておこうよ。
若葉　あたしもとうとうおばさんかぁ・・・。
千尋　あたしもおばさんだわ。
頼定　そうすると俺はおじさんだな。
若葉　絶対におばちゃんて呼ばせないようにしよっと。
頼定　女の子だったらおじさまと呼ばせたいなぁ。
千尋　じゃああたしはおばさま？
頼定　そうなるかなぁ。
若葉　若ちゃんて呼ばせようっと。
千尋　若おばちゃんてのどう？

若葉　なんですって？
頼定　お前、それ二重三重の意味でひどいぞ。
千尋　はっはっは。
若葉　さてと・・・。

若葉、立ち上がり、お茶を片づけ始める。

千尋　ああ、片づける？
若葉　いいっていいって、妊婦は座ってなさい。
千尋　ああ、なんか妊婦って言われるのやだなぁ。
若葉　だってしょうがないじゃない、妊婦なんだから。
千尋　あの子も妊婦なんだよねぇ。
若葉　ああ。
千尋　お父さんの気持ちは、良くわかるねぇ。
頼定　ごちそうさまでした。
若葉　はいどうも。

と、頼定はお茶を飲み干し、若葉に渡すと、飯台につく。
若葉は外を眺めながら。

若葉　どうなってるかな？
千尋　何が？
若葉　忠房たち。
頼定　奇襲は成功したけどね。
千尋　まあ、なるようにしかならないでしょう。
若葉　そうね。
頼定　さて、そろそろ帰るか。
千尋　そうね。
若葉　なに？　もうちょっとゆっくりしてけばいいのに。
頼定　また、明日来ますよ。っていってもお姉さんも帰るのか。
若葉　え？
千尋　明日のお葬式手伝うの？
頼定　まあ、ちょっとくらいはね。せめて人数でも出さないとあれでしょ、竹花家じゃ。
若葉　ああ。

若葉、お茶を片づけて去る。

千尋　・・・なんで言っちゃうのよ。
頼定　え？

千尋　あたしお母さんにしか言ってないって言ったでしょ。
頼定　え？　何が？

千尋、無言で自分のお腹を指し示す。

頼定　あ、うん、でも、だってしょうがないじゃない話の成り行き上。
千尋　お姉ちゃんとこ子どもいないの知ってるでしょ。
頼定　まあね、でも、だっていずれわかるんだからさぁ。
千尋　だからって時期を考えてよ。お姉ちゃんずっと帰ってないんだから。
頼定　ずっとって？
千尋　お父さん死んでから。
頼定　え？　ずっと？
千尋　だからさぁ、今日だって昭久さんどっか行っちゃったし。
頼定　帰ったんじゃないの？
千尋　だからそれじゃ困るでしょ。
頼定　なんで困るの？
千尋　離婚しちゃったら。
頼定　でも、それはしょうがないじゃない、お姉さんの幸せの問題なんだから。離婚したからって不幸になるとは限らないじゃない。
千尋　お姉ちゃんだって離婚したいわけじゃないの。
頼定　え？
千尋　あたしだってほっとしてるもん。
頼定　何が？
千尋　あなたは知らないかも知れないけど、結構プレッシャーキツイの。お寺に嫁いで子どもできないと、どこで何言われてるかわかんないのよ。檀家さんの目だってあるし。それがどこからともなく伝わってくるのよ。
頼定　まあな・・・。
千尋　お姉ちゃんベタ惚れなんだから。
頼定　え？
千尋　昭久さんに。
頼定　ええーっ！
千尋　お寺の手伝いなんかしたこと無いのに、昭久さんとつきあうようになってから別人のように手伝うようになったのよ。
頼定　女心ですかね。
千尋　そんなしおらしいものがお姉ちゃんにあったかどうだかはわかんないけど、作戦であったことは間違いないわね。

頼定　作戦かぁ・・・お前も？
千尋　さあてね。
頼定　どっちかね？
千尋　何が？
頼定　子ども。
千尋　どっちがいい？
頼定　んー・・・どっちでもいいかな。
千尋　お兄ちゃんは・・・どっちかな？
頼定　面白そうだね。
千尋　いとこ同士ねぇ。

遠くから特徴的な車の音がする。それは、昭久のスバル３６０の音らしい。

頼定　ん？
千尋　なに？
頼定　あの音。
千尋　なに？
頼定　違うかな？
千尋　だからなに？
頼定　ちょっと見てくる。
千尋　ちゃんと説明してよ！

頼定、玄関から走り去る。

千尋　まったく・・・でも、まあ、いいか・・・さてと、帰ろうかな。

千尋、台所の方に去りかける。
と、台拭きを持った若葉とすれ違う。

千尋　あ、お姉ちゃん、あたし、帰るね。
若葉　ああ、うん。頼定さんは？

若葉は、飯台を拭き始める。

千尋　なんか、急に出てった。
若葉　けんか？
千尋　違う。なんか、音がするって。
若葉　あ、そう。

千尋　いたって仲良しですよ。
若葉　ふーん。
千尋　もし戻ってきたら先に帰ったって言っといて。
若葉　ああ、うん。
千尋　お姉ちゃんも、早く帰った方がいいよ。
若葉　はいはい。
千尋　いいタイミングじゃない。
若葉　だって・・・。
千尋　ホントに帰っちゃったのかなぁ。
若葉　わかんないわよ！
千尋　怒った？
若葉　別に。
千尋　小うるさい小姑がいたらお兄ちゃんも大変だよ。
若葉　うるさいわねぇ。

飯台を拭き終わった若葉は、それを片づけようとする。
それを見た千尋が手伝おうとすると。

若葉　妊婦が重い物持っちゃダメ！
千尋　大丈夫だよ、このくらい。
若葉　ダメったらダメ！
千尋　ごめん。
若葉　大丈夫！　お姉ちゃんは強いんだから。
千尋　知ってる。

本堂の入り口にデイヴィッドが現れる。

デイヴィッド　あ、手伝いましょう。
若葉　あ、デイヴィッド。
デイヴィッド　手伝いましょう。
若葉　どうなった？　あっちは？
デイヴィッド　やっぱり、日本は平和ですね。
若葉　平和ですか。
デイヴィッド　はい、和平交渉が成立するみたいですね。
若葉　和平交渉って、ずいぶん難しい言葉知ってるのね。
デイヴィッド　まあ・・・。

とかなんとかやってる間に上がって、飯台の片付けを手伝うデイヴィッド。

若葉　ありがとう。
千尋　そんじゃ、ちょっと荷物取ってくる。

と荷物を取りに台所の方に去る千尋。
デイヴィッドは黙々と飯台を片づける。
若葉は残ったお茶道具を片づける。
そして、片付け終わった。

若葉　ありがとう、助かっちゃった。あとは、座布団だけだから。
デイヴィッド　どういたしました。
若葉　え？　あ、それは、どういたしまして。
デイヴィッド　どういたしまして。
若葉　Ｇｏｏｄ。
デイヴィッド　あのー、さっきの、なぞなぞですか？
若葉　え？
デイヴィッド　朝は草、昼は虫、夜は何？
若葉　ああ、あんなの適当よ。
デイヴィッド　わかりました。
若葉　え？
デイヴィッド　わかりました、夜はｎｉｇｈｔ。
若葉　うん。

そこへ荷物を持った千尋が通りかかる。

千尋　それじゃまたねー。外でお母さんには声かけるから。
若葉　うん。
デイヴィッド　ｋｎｉｇｈｔは騎士です。
若葉　朝は草、昼は虫、夜は騎士。
デイヴィッド　Ｙｅｓ。
千尋　んじゃＧｏｏｄ ｂｙｅ。
デイヴィッド　さよなら。
若葉　またねー。
デイヴィッド　植物の麻、虫のヒル、だから夜は騎士です。
若葉　ダジャレか。
デイヴィッド　そうです。
若葉　ふーん。
デイヴィッド　それじゃまた。

デイヴィッドはそのまま本堂から去って上手へ。
千尋玄関から去りかけると、戻ってきた美貴とすれ違う。

美貴　（声）あらちいちゃん帰るの？
千尋　うん。
美貴　（声）大事にするのよ。
千尋　（声）うん。じゃあね。
美貴　（声）気をつけてね。
千尋　（声）すくそこだよ。
美貴　（声）それもそうだわねあっはっは。

美貴玄関より登場。
若葉は残った座布団に座る。

若葉　どうだった？
美貴　里見ちゃんいい子よぉー。
若葉　もう里見ちゃんか。
美貴　だって里見ちゃんじゃないの。
若葉　そうだけどさ、聞いた？
美貴　何を？
若葉　忠房の子どもの話。
美貴　え？
若葉　もういるんだってお腹の中に。
美貴　あらまあ！（嬉しそう）それじゃ二人のおばあちゃんにな
　っちゃうわねぇ、あらやだまぁ、あ！
若葉　聞いた。
美貴　え？
若葉　聞いたよ。
美貴　あらそう。
若葉　気ぃ遣わせてすいませんね。
美貴　悪気はなかったのよ。ねえ若ちゃん。
若葉　わかってるわよ。できるところにはできるのよね。
美貴　そうねぇ。
若葉　でも、大丈夫よ、大丈夫、おめでたいんだから。
美貴　そうよね、おめでたいのよね、四十九日も済んだことだし、
　お祝いしましょうか。
若葉　そうですね
美貴　お赤飯でも炊いて。
若葉　今から？
美貴　じゃあ、なんか買ってきて。
若葉　あたし行ってこようか？
美貴　いいえ、おばあちゃんのわたしが行って来ます。

若葉　忠房は何やってんの？
美貴　なんか、その辺で黄昏れてくるみたいよ。
若葉　あ、そう。

と、美貴は財布を取りに台所に去る。
一人残る若葉。

若葉　はあーっ（ため息）。黄昏れたいのはあたしだよ。

頼定、本堂の入り口から顔を出す。

頼定　あれ？　お姉さん一人？
若葉　ああ、千尋帰ったよ。
頼定　ああ、先に帰りましたか。
若葉　会わなかった？
頼定　ええ、あの、昭久さん来てないですか？
若葉　え？
頼定　いや、あの、車あったから、あれ？　いや、違う人かな。
若葉　何？
頼定　スバル３６０。
若葉　え？
頼定　まあ、いいや、あのくどい冗談聞く前に帰らないと、あ、いや、すいません。
若葉　正解！
頼定　え？
若葉　くどい。
頼定　そうでしょう！　いやあ、やっぱりなぁ、あ、いや、すいません。
若葉　いいのよ。
頼定　それじゃ、また。
若葉　またね。

頼定去る。
また一人残る若葉ぼーっと頼定の去ったあとを眺めている。

若葉　やっぱり来ないのかな。

美貴登場。

美貴　じゃあちょっと行って来るわね。
若葉　行ってらっしゃい。
美貴　おぼうちゃん帰ってきたらさぁ、お逮夜行く前にケーキだけでも食べてってって言っといて。
若葉　はあい。
美貴　何がいい？
若葉　え？
美貴　ケーキ。
若葉　うーん・・・なんでもいい。
美貴　じゃあ行ってきます。

美貴は行きかけるが、いつの間にか本堂の入り口に昭久が立っている。

若葉　あ。
美貴　昭久さん？
若葉　帰ったんじゃなかったの？
美貴　あらあらまあまあ。
昭久　お母さん、今日は連れて帰ります。
美貴　あら良かったわぁぁ、もうこのままうちで小姑になるんじゃないかと心配してたの。忠房がね、これが結婚することになっちゃって、急に。
昭久　ええ？！
美貴　まあ、詳しいことはね、若ちゃんから聞いて。それじゃあたし買い物に行ってくるから。
昭久　行ってらっしゃい。

美貴鼻歌を歌いながら去る。

昭久　忠房君結婚するの？
若葉　（同時に）勝手に決めないでよ。
昭久・若葉　え？

間。

昭久　迎えに来た、ついでじゃなくてあらためて迎えに来た。
若葉　帰ったの？
昭久　途中まで。
若葉　そのまま帰って良かったのに・・・。
昭久　意地の悪い小姑にするわけにいかないだろ。

若葉　意地悪くないです。
昭久　あ、うん、そうだな。

間。

若葉　お茶でも飲む？
昭久　いや、いい。
若葉　あそう。
昭久　・・・・帰ろう。
若葉　・・・・あたし、疲れちゃったのよ。
昭久　俺もだ・・・・。
若葉　あなたのくどい冗談に。
昭久　え？

昭久なにやら手に持っていた物を体の後ろに隠す。

若葉　何？
昭久　いや・・・・。
若葉　何それ。
昭久　見つかっちゃった？

と、昭久が出したのは、花の開いたふきのとうだった。

若葉　何？
昭久　ばっけ。
若葉　ばっけがどうしたの？
昭久　秋田の花。
若葉　ふーん。
昭久　花言葉は「愛嬌」。
若葉　それ、探しに行ってたの？
昭久　いや、あの、うん、まあ。

若葉、大きなため息をつく。

昭久　疲れないようにするから・・・・頑張らなくていいから。
若葉　それだけ？
昭久　あ、はい、これ。

と、ふきのとうを差し出す。

若葉　・・・ありがとう。
昭久　ばっけ味噌でもつくってくれ。
若葉　これだけで？
昭久　もっと探すよ。
若葉　薹が立ってるわよ。
昭久　なぞなぞ。
若葉　え？
昭久　なぞなぞ、できなかったら、一緒に帰ろう。
若葉　・・・いいわよ。
昭久　朝は草、昼は虫、夜はなーんだ。
若葉　ああ。
昭久　十数える間考えて。
若葉　わからないと思ってる？
昭久　十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、〇。
若葉　どうせ答えなんかないんでしょう。
昭久　あるよ。
若葉　教えて。
昭久　じゃあ、一緒に帰ろう。
若葉　しょうがないわね。
昭久　夜は騎士。

そこへ、玄関から、忠房が戻ってくる。

忠房　あ、昭久さん。
昭久　おう。
忠房　どこ行ってたんですか？
昭久　結婚するんだって？
忠房　え？　ええ、まあ、多分。
昭久　おめでとう。
若葉　あたし、荷物取ってくる。
忠房　あ、帰る？
若葉　うん、そうする。
忠房　気をつけて。
若葉　うん。
忠房　お母さんは？
若葉　買い物、お祝いのケーキ。
忠房　なんのお祝いよ。
若葉　あんた以外誰がいるのよ。
忠房　いや、千尋とか。
若葉　ああ、それも

忠房　え？
若葉　あたしだけだわ、おめでたくないのは。
忠房　千尋は何？
若葉　おめでた。
忠房　ええーっ？
昭久　そりゃおめでとう。
忠房　（同時に）そりゃおめでたいわ。
忠房　で、千尋は？
若葉　帰った。
忠房　あ、そう・・・帰っちゃうんだよね。
若葉　うん。
忠房　ということは、俺、お母さんと二人でケーキ食うのか？

と言ってる間に若葉は台所に去る。

昭久　いいじゃないか、親子水入らずで。
忠房　そうですかぁ。
昭久　水入らずの時期なんてそう長くないんだから。
忠房　まあ、そうですね。
昭久　じゃあ俺、気が変わらないようにちょっと親切にしてくる。

と、昭久台所に去りかける。

忠房　あの、姉ちゃんのこと、よろしくお願いします。
昭久　・・・任せとけ。

昭久台所に去る。

忠房　親切は、逆効果じゃないかなぁ。

忠房、懐から新品のタバコを取り出す。ペリペリと開け始める。そして、一本くわえると、火を探す。しかし、無い。
仕方なく戻そうとするが、戻らない。そうこうしている間に、本堂の入り口から里見が顔を出す。

里見　何やってるんですか？
忠房　あれ？
里見　サンダル、はいたまま行っちゃって・・・。
忠房　ああ。

忠房しまいかけたタバコをくわえる。

里見　佐藤商店の前まで行って気がついた。
忠房　あそこまで行っちゃったか。
里見　うん、間抜け。
忠房　どうぞ、あがって・・・。
里見　あ、はい・・・。
忠房　火が、ないなぁ。

里見上がると、サンダルをきちんと揃える。
忠房は、里見の座布団を準備する。

忠房　あ、ちょっと、お茶持ってくる。
里見　行かないで。
忠房　え？
里見　・・・怖いから。
忠房　ああ。

忠房再び座布団に座ると、里見にも座布団をすすめる。

忠房　どうぞ、座布団。
里見　どうも、ありがとうございます。

忠房、またくわえたタバコを箱に戻そうとするが、あきらめてしばらくいじっている。そして、決心したように、やおら耳に挟む。
そこに声がして、昭久がやたらとたくさん荷物を持ってやってくる。

昭久　なんだちゃんとまとめてんじゃない。やっぱりなぁ、最初からなぁ、まったく素直じゃないんだから。お？
忠房　あ、昭久さん。
昭久　まったく荷物、こんなに。
里見　こんにちは。
昭久　あ、どうも。ん？　あれ？　あれあれあれぇ？
忠房　なんですか？
昭久　あれあれあれぇ？

そこへ現れる若葉。

若葉　忘れものは特にない・・・あれ？
里見　あの、サンダル履いてっちゃって。
若葉　あ、お茶。
里見　いえいえ、お構いなく。すぐ帰りますから。
若葉　そんなこと言っても・・・。
忠房　いいから、姉ちゃん。
若葉　あらそう？
昭久　それじゃあ、先を急ぎますので。
忠房　気をつけて。
若葉　んじゃまたね。
里見　さようなら。

若葉、昭久、玄関に去りかける。
間。

忠房　あの・・・。
里見　何？

昭久、戻ってくる。二人の様子を伺い、にやにやしている。
その顔を見て牽制する二人。

忠房　なんですか？
昭久　あ、履き物、こっち。
忠房　ああ・・・。

昭久、二人を観察しながら草履を履く。

若葉　（声）何やってんのー！
昭久　あー、草履、こっちー。
若葉　（声）じゃましちゃだめよー！
昭久　じゃましてないよー。じゃ、頑張って。

と、帰ろうとする。

忠房　あの！

立ち止まる昭久。

忠房　火、持ってませんか？

昭久、にやりと笑い、懐から徳用マッチの大きな箱を出す。

昭久　返さなくていいから。

素早く去る昭久。
その徳用マッチの箱を取りに行って、忠房の前に差し出す里見。

忠房　ありがと。
里見　・・・なんでこんなの持ってんのかな？
忠房　わかんない・・・あ、灰皿ないや。

立ち上がろうとする忠房。

里見　逃げないで！
忠房　あ、うん。

座り直す忠房。正座である。
間。

忠房　ごめん！
里見　え？
忠房　ごめん！
里見　なんで謝るの？
忠房　いや。
里見　嘘なの？
忠房　嘘じゃない、嘘じゃない、絶対に。
里見　じゃあなんで？
忠房　いや、勝手に言っちゃったから・・・。
里見　・・・嬉しかった。
忠房　あ、いや、うん、どうも。
里見　でも、順序が逆でしょ。
忠房　え？
里見　順番。
忠房　・・・そうだね。
里見　プロポーズして。
忠房　え？

里見　ちゃんとして。
忠房　いやあ・・・。
里見　んじゃ帰る！（立ち上がる）
忠房　待って！　ちょっと待って！　ごめん、急だったから。今、すぐ。ちゃんとするから。

里見、座り直して背筋をぴんと伸ばす。

忠房　・・・・・・結婚、する、か？
里見　なんで聞くのよ。
忠房　あ、いや、ごめん。
里見　謝らないで。
忠房　あ、いや・・・どうも。
里見　はい。
忠房　あの・・・言っとくけど、結婚式は、仏式だぞ。
里見　はい。
忠房　ウエディングマーチじゃなくて、お経だぞ。
里見　はい。
忠房　指輪じゃなくて、数珠の交換だぞ。
里見　はい。
忠房　それでもいいのか？
里見　はい。
忠房　・・・結婚しよう。
里見　・・・はい。

二人、大きく深呼吸をする。

忠房・里見　ぷはぁー。
里見　・・・お経かぁ。
忠房　うん・・・。
里見　ねえ、叩いてみていい？
忠房　何を？
里見　それ・・・。

里見、鐘を指さしている。

忠房　ああ。
里見　ダメ？
忠房　いいよ、でも、その代わり叩いたらお経上げなくちゃいけないんだ。

里見　いいですよ。
忠房　んじゃあ、はい。

と、バチを差し出す。

里見　その代わりちゃんと教えてね。
忠房　はいはい。

鐘の縁を叩く里見。

忠房　そこじゃないんだ。
里見　え？
忠房　横、鐘の横を叩くんだよ。
里見　こう？

と、叩いてみる里見。

忠房　違うんだなぁ。

忠房、里見の手を取って叩く。

忠房　こう、この辺をね、上から三分の一あたり、一回目は、叩いて押しつける。で、響きを押さえて、二回目を響かせる。ね。

鐘の音が響く。

忠房　じゃあやってみて。
里見　はい。

鐘の音。
忠房は、経文を差し出す。

忠房　（読経）帰命無量寿如来。はいここ、リピートアフターミー。
里見　え？
忠房　（読経）帰命無量寿如来。
里見　（真似する）帰命無量寿如来。
忠房　（読経）南無不可思議光。
里見　（真似する）南無不可思議光。
忠房　（読経）法蔵菩薩因位時。

里見　（真似する）法蔵菩薩因位時。

ゆっくりと舞台は暗くなって行く。
次第に読経は一つになり、また徐々に人数が増えていく。
暗闇に読経が響き渡る。
そしてぷっつりと読経がとぎれ、鐘の音が響く。

―了―